読書科学

第12巻 第 2 号（通巻 第44号）　昭和44年 1 月20日 発 行（季刊）

昔話　桃太郎像の変遷(四)　滑川　道夫
童話の原話と再話の比較研究　久本　智子
　　芳賀　純
絵本と子ども　阪本　一郎　藤井　真澄
　　堤　淑子　荒井　佳子
小泉信三の読書論　飛田　文雄
漫画「長靴の三銃士」　阪本　一郎

44

日本読書学会

◇本　号　目　次◇

原　著

昔話　桃太郎像の変遷(四)　東京教育大学　滑川道夫　1

児童文学における童話の原話と再話の児童による鑑賞態度の比較研究　資母小学校　久本智子　神戸大学　芳賀純　15

絵本と子ども　日本女子大学　阪本一郎　藤井真澄　堤淑子　荒井佳子　23

小泉信三の読書論について(二)　東京女子体育大学　飛田文雄　30

児童漫画『長靴の三銃士』　日本女子大学　阪本一郎　36

書　評

平岡敏夫：速解現代国語

浜中重信：小学生の読書指導

会　報

日本読書学会役員

会　長（理事長）阪本一郎

常任理事（*印は庶務担当）

大内　茂男　*岡田　明　岡本　奎六　加賀　秀夫　倉沢　栄吉
*阪本　敬彦　佐藤　泰正　滑川　道夫　波多野完治　平沢　薫
福沢　周亮　村石　昭三　山本　晴雄　*室伏　武

監　事　深川　恒喜　望月　久貴

理　事

井口　忠司　井沢　純　石森　延男　出雲路　猛　裏田　武夫
大西誠一郎　岡田　温　尾原　淳夫　加賀　栄治　楮本　良平
金沢　孝　叶沢　清介　蒲池　正夫　久保田彦穂　小針　孝哉
西藤寿太郎　佐藤宏之助　佐藤　貢　清水　慶子　清水　正男
竹内　実次　西村　友円　芳賀　純　花田　哲幸　浜中　重信
古野　有隣　藤田　圭雄　本間　康平　松村　康平　松本　武
嶺　光雄　三輪　計雄　三輪　和敏　森田　宗一　弥吉　菅一
弥吉　光長　渡辺　茂男　渡辺　正亥　渡辺　正己

編集委員

阪本　一郎　滑川　道夫　波多野完治　平沢　薫　深川　恒喜
山本　晴雄

昔話　桃太郎像の変遷（四）*

東京教育大学

滑　川　道　夫**

(2)　大正・昭和期の桃太郎

大正デモクラシーの影響を受ける時期からは，桃太郎の民本主義化が，徐々に進行していく。なんといっても，大正7年の“赤い鳥”（鈴木三重吉主宰の児童文芸誌）創刊の時点から変化が起ってくる。

その変化は，主として，創作童話興隆期の児童文学における“桃太郎像”として別に扱うことにする。

明治末期から改正されなかった，国語読本が，大正7年になって，“尋常小学校国語読本”（通称・白読本）が，文部省から刊行される。それ以来，昭和7年まで，この読本が使用されるから，この読本になじみのある人たちが多いはずである。

モモタラウ

尋常小学国語読本（白読本）巻一
大正7年～昭和7年
国定　文部省

ムカシ　ムカシ，オヂイサン　ト　オバアサン　ガ　アリマシタ。オヂイサン　ハ，山　ヘ　シバカリ　ニ　イキマシタ。オバアサン　ハ　川　ヘ　センタク　ニ　イキマシタ。

オバアサン　ガ，川　デ　センタク　ヲ　シテ　キマス　ト，オホキナ　モモ　ガ　ナガレテ　キマシタ。

オバアサン　ハ，ソノ　モモ　ヲ　ヒロツテ，カヘリマシタ。

オバアサン　ガ　モモ　ヲ　キラウ　ト　シマスト，モモガ　二ツ　ニ　ワレテ，ナカカラ　オホキナ　ヲトコ　ノ　コガ　ウマレマシタ。

オヂイサンハ，ソノ　コ　ニ，モモタラウ　ト　イフ　ナヲ　ツケ　マシタ。

モモタラウ　ハ，ダンダン　オホキク　ナツテ，タイソウツヨク　ナリマシタ。

「モモタラウサン，モモタラウサン，アナタ　ハ　ドチラヘ　オイデ　ニ　ナリマス　カ。」

「オニガシマ　ヘ　オニセイバツ　ニ。」

「オコシ　ノ　モノ　ハ，ナン　デス　カ。」

「ニツポン一　ノ　キビダンゴ。」

「一ツ　クダサイ　オトモ　シマス。」

「ソレ　ナラ　ヤル　カラ　ツイテ　コイ。」

犬　ヲ　ケライ　ニ　シテ　イキマス　ト，サル　ガ　キマシタ。サル　モ　ダンゴ　ヲ　モラツテ，ケライ　ニ　ナリマシタ。コンド　ハ　キジ　ガ　キマシタ。キジモ　ダンゴヲモラツテ，ケライ　ニ　ナリマシタ。

オニガシマ　ニ　ツイテ　ミマス　ト，オニドモ　ハ，テツノ　モン　ヲ　シメテ，シロ　ヲ　マモツテ　キマス。モンヲヤブツテ　セメコミマシタ。

キジ　ハ　ツツキ　マハリ，サル　ハ，ヒツカキ　マハリイヌ　ハ　カミツキマワリマス。

モモタラウ　ハ，カタナ　ヲ　ヌイテ，一バン　オホキナオニ　ニ　ムカヒマシタ。オニドモ　ハ　カウサン　シテ，ダイジナ　タカラモノ　ヲ　ダシマシタ。

クルマ　ニ　ツンダ　タカラモノ，イヌ　ガ　ヒキダス　エンヤラヤ。サル　ガ　アト　オス　エンヤラヤ。キジ　ガ　ツナ　ヒク　エンヤラヤ。　ヲハリ。

全体で11ページで，各ページに挿絵がある。桃太郎は，鎧に陣羽織りすがたで，鉄扇を持っている点は明治

---

*　Transition of the image of Momotarō, a Japanese old tale, (4)

**　NAMEKAWA, Michio (Tokyō Univ. of Education)

期と変りがない。

大きな変化は，これまでの“ぢゞばゞ”が“おじいさん，おばあさん”に，置き換えられた点である。以降，教科書教材はもちろん，絵本・童話の桃太郎ばなしは，すべて，おじいさん・おばあさんとなる。

この読本が刊行されたのは，大正7年1月であるが，この年の7月には，日本の児童文学を近代化した“赤い鳥”が創刊される。大正デモクラシイの運動が，児童教育のうえにもしだいに影を濃くしていくのである。

分量のうえでは，明治33年版と大差がないが，この大正桃太郎では，鬼が島征伐の理由が省略されている。キビダンゴ作りも省略されている。最後に宝物を“ぢゞ・ばゞ”にさしあげ，イヌ・サル・キジにも分配してやる箇所も省略されている。宝物を積んだ車をひいて，凱旋する場面で終っている。しかも，エンヤラヤの歌で終幕としている。この終幕は，前教科書（明治43年版）そのままを借用しているのである。

(1) 誕生　(2) 出陣　(3) 戦闘　(4) 凱旋という四部構成の“凱旋”だけが，掛声まじりのよろこびの歌になって，明治桃太郎の昔ばなしが，近代化される過程を示している。昔話としては，省略が多いが，これは，明治43年版と同様に，子どもたちが家庭で，桃太郎ばなしを，聞いて知っているだろうという予想のもとに，教材化されていると思われる。まだこの時点では，日本の家族構成の一般的状況は，現在のような単一家族ではなく，おじいさん・おばあさんと，同居している方が多かったから，子どもたちが，祖父母から，昔話や民話を聞く機会にまだめぐまれていた。祖父母が語らない場あいでも，父母が語って聞かせる余裕のあった時代である。ラジオもテレビもない時代である。

全体が簡略に表現されているが，明治桃太郎からみると，平易な表現になり，文語調がしだいに影をひそめていく状況を示している。

鬼が島征伐もへたな理由づけをせずに，鬼を征伐するのは当然のことのようにあっさり扱っている。鬼が降参して宝物をさしだすのも，それを受け取るのもすごくあっさりと当然のように扱っている。つまり，侵略思想とか，掠奪だとかいうおとなの考え以前の，“お話の世界”を現出しているのである。民衆が，子どもたちのために伝承する心も，そんなふうに，理くつ抜きのものであったろう。侵略主義は，子どもたちに関係のないものである。

“鬼の大将”と，いわずに，“一ばん大きな鬼に向いました”というのも，明らかに，童話的次元の世界であっておもしろい。こういう変化にも，やはり，大正という時代を感じさせる。

この読本は，通称“サクラ読本”が出現する昭和8年まで使用される。その間ほぼ15年この“桃太郎”が定着していたことになる。その間，日本の児童文学は，“赤い鳥”を中心にして創作童話・童謡時代を現出して，活気あるもりあがりを見せる。昔話・民話の童話化もおこなわれる。“桃太郎”もその状況のなかで再話され，再創造の対象になる。これについては，後述することにする。

ところで，この読本についで，表紙に桜花をあしらった通称“サクラ読本”が刊行される。

小学国語読本・尋常科巻一（サクラ読本）
国定・文部省　昭和8～16年

ムカシ　ムカシ，オヂイサン　ト　オバアサン　ガ　アリマシタ。オヂイサン　ハ，山　ヘ　シバカリ　ニ　イキマシタ。オバアサン　ハ　川　ヘ　センタク　ニ　イキマシタ。

オバアサン　ガ，川　デ　センタク　ヲ　シテ　キル　ト，川カミ　カラ　大キナ　モモ　ガ　ドンブリコ　ドンブリコ　ト，ナガレテ　キマシタ。

オバアサン　ハ　ソノ　モモ　ヲ　ヒロツテ，ウチヘ　カヘリマシタ。

オヂイサン　ガ，山　カラ　カヘツテ　キタ　トキ，オバアサン　ガ　ソノ　モモ　ヲ　ミセマシタ。オヂイサン　ハ，

「コレ　ハ　コレ　ハ，メヅラシイ　大キナ　モモ　ダ。」

ト　イツテ，ヨロコビマシタ。

オバアサン　ガ　モモ　ヲ　キラウト　シマシタ。スルト，モモ　ガ　二ツ　ニ　ワレテ，ナカカラ　大キナ　ヲトコノコ　ガ　ウマレマシタ。

オヂイサン ハ，モモ ノ 中 カラ ウマレタ ト イフ ノデ，モモタラウ ト イフ ナ ヲ ツケマシタ。

モモタラウ ハ，ダンダン 大キク ナツテ，タイソウ ツヨク ナリマシタ。

アル日，モモタラウ ハ オヂイサン ト オバアサン ニ，

「ワタクシ ハ，オニガシマ ヘ，オニタイヂ ニ イキマス カラ，キビダンゴ ヲ コシラヘテ クダサイ。」

ト，マウシマシタ。

フタリ ハ，オダンゴ ヲ コシラヘテヤリマシタ。

モモタラウ ハ，イサマシク デカケマシタ。

スコシ イクト，ムカフ カラ 犬ガ キマシタ。

「モモタラウサン，モモタラウサン，ドコ ヘ オイデ ニ ナリマスカ。」

「オニガシマ ヘ オニタイヂ ニ。」

「オコシ ニ ツケタ モノ ハ，ナン デス カ。」

「ニツポン一 ノ キビダンゴ。」

「一ツ クダサイ オトモ シマセウ。」

モモタラウ ハ，犬 ニ オダンゴ ヲ ヤリマシタ。犬 ハ，ケライ ニ ナツテ ツイテ イキマシタ。

ソレカラ スコシ イク ト，ムカフ カラ サル ガ キマシタ。

「モモタラウサン，モモタラウサン，ドコ ヘ オイデ ニ ナリマス カ。」

「オニガシマ ヘ オニタイヂ ニ。」

「オコシ ニ ツケタ モノ ハ，ナン デス カ。」

「ニツポン一 ノ キビダンゴ。」

「一ツ クダサイ，オトモ シマセウ。」

サル モ，ダンゴ ヲ モラツテ，ケライ ニ ナリマシタ。犬 ト サル ヲ ツレテ，マタ スコシ イク ト，コンド ハ キジ ガ キマシタ。

「モモタラウサン，モモタラウサン，ドコ ヘ オイデ ニ ナリマス カ。」

「オニガシマ ヘ，オニタイヂ ニ。」

「オコシ ニ ツケタ モノ ハ，ナン デス カ。」

「ニツポン一 ノ キビダンゴ。」

「一ツ クダサイ，オトモ シマセウ。」

キジ モ ダンゴ ヲ モラツテ，ケライ ニ ナリマシタ。

モモタラウ ハ，犬 サル キジ ヲ ツレテ，オニガシマ ニ ツキマシタ。

オニハ，テツ ノ モン ヲ シメテ，シロ ヲ マモツテ キマシタ。キジガ，トンデ イツテ，上 カラ テキ ノ ヤウス ヲ ミマシタ。

サル ハ スルスル ト モン ヲ ノボツテ，中 ヘ ハイリマシタ。サウシテ，モン ノ ト ヲ アケマシタ。モモタラウ ハ 犬 ト イツシヨ ニ セメイリマシタ。モン ヲ ヤブツテ セメコミマシタ。

キジ ハ スバヤク トビマハツテ，オニ ノ 目ヲ ツツキマシタ。サル ト 犬 ハ ヒツカイタリ，カミツイタリシテ オニ ヲ クルシメマシタ。

モモタラウ ハ，カタナ ヲ ヌイテ，オニ ノ タイシヤウ ニ ムカヒマシタ。オニ ノ タイシヤウ ハ，イツシヤウケンメイ ニ タタカヒマシタ ガ，トウトウ マケマシタ。オニ ハ，ミンナ，モモタラウ ニ カウサン シマシタ。ダイジナ タカラモノ ヲ ダシマシタ。

「モウ，ケツシテ 人 ヲ クルシメタリ，モノ ヲ トツタリ イタシマセン。イノチ ダケ ハ，オタスケ クダサイ。」

ト マウシマシタ。

モモタラウ ハ，オニ，ヲ ユルシテ ヤリマシタ。

オニ ハ，オレイ ニ，イロイロ ノ タカラモノ ヲ，サシダシマシタ。モモタラウ ハ，タカラモノ ヲ モツテ，オニガシマ ヲ ヒキアゲマシタ。

タカラモノ ヲ ツンダ クルマ ヲ，犬 ガ ヒキマス。サル ガ アトオシ ヲ シマス。キジ ガ ツナ ヲ ヒキマス。

「エンヤラ ヤ。」

「エンヤラ ヤ。」

ト，カケゴエ イサマシク カヘツテ キマシタ。

オヂイサン ト オバアサン ハ，タイソウ ヨロコンデ モモタラウ ヲ ムカヘマシタ。

以上が，通称「さくら読本」の“桃太郎”の全文である。巻一の最後を飾る教材で，全文21ページという一年生向きとしては思いきった長文になっている。さし絵は，①おばあさんの洗濯 ②桃太郎の誕生 ③出陣 ④犬との対面 ⑤サル，キジとの対面 ⑥鬼ガ島の城門をサル，キジが越える場面 ⑦戦闘場面 ⑧鬼の大将があ

やまっている場面　⑨凱旋　という従来になく豊富になっている。この「さくら読本」から，低学年の教科書が色彩刷りになるのだから，“絵本教科書”などといういやみとも賛辞ともつかない批評があった。桃太郎はりりしい美少年として描かれている。

この昭和８年に世に出た教科書は，従来のかた苦しい国定教科書を革新させたということで，一般的には好評をもってむかえられたものである。

すでに大正期の自由主義教育・芸術教育・文芸教育の最盛期がすぎ去ってはいたが，読解指導を中心とする国語教育界は，垣内松三の「国語の力」西尾実の「国語国文の教育」を中心とする文学形象理論が，実践指導に勢力的な影響をもってきた時点である。芦田恵之助の読み方指導は全国的に影響を与えていた。綴方教育の面では「赤い鳥」綴方とそれを克服する生活綴方が台頭していた。また，教育，心理，国語，言語等の学者からも，国語教育に対する発言が多くなってきた。城戸幡太郎・石山脩平・青木誠四郎・波多野完治・保科孝一・大西雅雄・金原省吾等が浮んでくる。形象理論ばかりでなく，解釈学・表現学が，国語教育思潮にとりいれられて探究される時代であった。

もはや，灰色の表紙であるハナ・ハト・マメ・マス・ミノ・カサ・カラカサという提出をしている「尋常小学国語読本」（大正７～昭和７）では，新らしい国語教育思潮に合わなくなっていた。大正15年の山本有三の国語教科書批判以来，新編集を要望する声が起っていたのである。国定教科書にあきたらない思いを持っていた実践国語教育者たちは，たとえば菊地寛の「小学童話読本」やその他の「文芸読本」「鑑賞読本」などの副読本を併用していたのである。

これらの要望にこたえて，「さくら読本」が編集された。開巻から単語の提出をやめて「サイタ　サイタ　サクラガ　サイタ」という独立した感動文から，始まるという改革をした。童話・童謡・詩・神話・伝説・劇・歴史説話などを多くとりいれたものは，従来見られなかった。

この教科書編集の主動力となったひとりに井上赳監修官がいる。かれは，文部省の在外研究員として，海外の教科書編集を視察して帰国し，意欲的に教科書ととり組んだ。「論理から心理へ，大人の世界から子どもの世界へ――それが最近における小学校低学年用教科書編纂法の転回である」（井上の編纂概説）とした。

さて，その井上赳の“モモタラウ”の解説の要点をあげてみよう。

「五大童話の随一として，我が国の児童に最も一般的な説話である。児童の最もよく知った内容から，文章，文字に取り附かせようとする編纂意図なのである」

「理知の進んだ大人は，しばしばこう考えたがる。――既に知った内容であれば，もう読む興味はなかろう。――しかし，そこに理知に生きる大人と，情意に生活する子どもとの相違がある。それは，何よりも，この“モモタラウ”説話の一部に現われている反復形式が最も雄弁に物語っている。」

子どもたちが，入学前にみんな“桃太郎ばなし”を聞いて知っているという前提でこの長文教材が提出されている。つぎには，反復形式が児童の心理に適応するものであることを強調する。

「桃太郎さん，桃太郎さん，どこへおいでになりますか。」以下「家来になってついていきました」までが，ていねいに，３回反復される表現をとっているのは，従来見られないところである。さらに井上は，小が大に対する勝利と反復の二つが童話の二大形式要素であると述べて，「三匹の子豚」や出雲神話の「国びき」「猿蟹合戦」「かちかち山」の例を挙げている。

反復形式が用いられるのは，口承的な民話系列の解説の特色であることは，ひろく知られている。この教材桃太郎の特色の一つでもある。また，この桃太郎像においては，宝物を分捕っていないように叙述されているところにも，文部省の配慮がうかがわれる。桃太郎は，降参した鬼をゆるしてやるという寛容の精神の持主になっている。そして，その寛大な徳に対して「鬼は御礼にいろいろの宝物をさしだしました」となっている。敗戦国が負担する「賠償」でもなく，「贖罪」と「感謝」のしるしである。この形が，以降の桃太郎ばなしに多用される

影響をおよぼしている。

もう一つ重要な点は，鬼の大将が降参したときのせりふに，もうけっして人を苦しめたり，物をとったりいたしませんと，言わせているところである。このことばによって，桃太郎の鬼が島征伐を正当化しているのである。「膺懲の軍」という皇軍の看板が想起されよう。桃太郎の鬼退治は「正義の師」であるということを鬼の側に言わせているのは従来見られないところである。

西尾実は，この教材の解釈においてつぎのように述べていることにもふかく関連する。

「昔から今に至るまで，日本国民としてこの童話で育てられなかった者はないといってよい。わけても単なる征服欲の所為としないで，正義の挙とした点に於て，まさに日本国民の性情の披瀝であり，その理想の具現であって，しかもどこからどこまでも明かるい童心の示現ならざるはない。将来も亦，永く国民精神の糧として語りつぎ，読みつがれてゆくであろう。」(「解釈」P252～3)

桃太郎は正義の士となって解釈されている。この時代における“国民精神総動員”運動，満州事変以来の大陸進攻を「聖戦」とみなし「八紘一宇」の思想によって，侵略思想がかざられるとき，「皇軍」は正義の士と宣伝される。そうした時代のなかでこの“桃太郎”が生まれ解釈されていると見なければならない。

昭和14年3月に，改訂した朝鮮総督府の初等国語読本巻一にも“桃太郎”が教材になっている。この教材には，文部省の「小学国語読本」と同一の挿絵を使っているが，本文の表現は，一段と平易なものになっている。表音的なかなづかいになっている。

(小学国語読本)	(初等国語読本)(朝鮮)
○オヂイサントオバアサンガアリマシタ	オジイサントオバアサンガイマシタ。
○山ヘシバカリニ	山ヘタキギヲトリニ
○ドンブリコドンブリコトナガレテキマシタ	ナガレテキマシタ。
○コレハコレハ，メヅラシイ大キナモモダ	ヤア，大キナモモダ

といった表現の簡略化がおこなわれている。イサマシクデカケマシタがゲンキヨクデカケマシタになり，戦闘場面も，モモタロウハモンヲヤブツテセメコミマシタ。……サルト犬ハ，ヒッカイタリ，カミツイタリシマシタ。と簡略に表現されている。鬼の大将が降参するところも「モウ，ケツシテワルイコトハイタシマセン。ドウゾオユルシクダサイ」トタノミマシタ。となっている。日本の桃太郎は475語で書かれているのに対して，朝鮮の桃太郎は385語でおさめられ，90語短かくなっている。しかし内容はまったく日本の教科書の文章表現に拠っている。この時点における台湾の教科書は未見であるがおそらく，日本の文部省に準拠して文教政策がおこなわれていたことと思われる。

(3) 国民学校時代の桃太郎

昭和16年3月1日に小学校令を改正して，国民学校令の公布となった。“皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ目的トス”(第1条)と規定して，皇国の道の修練に徹底することを要求していた。これに即応して教科の統合がおこなわれ，教科書も全面的に改訂された。

国語科は，修身・国史・地理とともに，国民科に統合されて，国民的自覚を喚起する教科となった。国民科国語の目的は，「日常ノ国語ヲ習得セシメ其ノ理解力ト発表力トヲ養ヒ国民的思考感動ヲ通ジテ国民精神ヲ涵養スルモノトス」と教則に規定した。

国語の教科書は，四期に分かれ，第1期の教科書は「ヨミカタ」(国語読本)とこれを言語的作業的に展開する「コトバノオケイコ」と，教師用書の三種となった。「ヨミカタ」の教材は「いわゆる高度国防国家体制をさながらに具現し，意義と感激をいよいよ深からしめる」(教師用書P48)ものとされた。

“桃太郎”教材もその一分節として位置を占める。前教科書(小学国語読本)を編集する役人の顔触れが大きく変動していないし，中心になった井上赳も変っていないから，桃太郎像は大きな変動が見られない。

桃の中から「男の子が生まれ」ましたの次に新らしく

「オヂイサンモオバアサンモ，タイソウヨロコビマシタ」が挿入されている。「オニノタイシャウハ，チカライッパイタタカヒマシタガトウトウマケマシタ。」となっている。前のはイッシャウケンメイニタタカヒマシタガであった。宝物を「オレイニ」さし出すのであったが，そこが省かれ，単にいろいろのタカラモノをさしだしたことになっている。そのほか8カ所ほど語句の修正があるだけの変化にすぎない。

さし絵は全面的に改められたが，印刷・紙質もわるくなって，前ほどの効果があがっていない。桃太郎のハチマキにも，陣羽織にも軍扇にも桃の実と葉のマークがつけられている。（前は軍扇に日の丸がついていた）ところが，凱旋を迎えるおじいさんおばあさんが描かれるようになって，おじいさんが，日の丸の小旗を振っているのである。こんなふうに，教材の表現は大同小異ながら，教師用書の解説は，つよく国民的感動を強調し，皇国主義の倫理を付加している。

「我が国童話の王座を占め，五大童話の随一たる桃太郎の説話を教材とする。

日本一の誇を黍団子に象徴し，孝行・正義・仁恕・尚武・明朗・進取――殆ど修身の徳目の大部分を無雑作に具体化したやうなこの童話である。よし自由主義時代にたまたま侵略的だといふ批評を蒙ったことはあっても，この日本的な童話の価値をどうすることもできなかったのである。」（P203）

ここに明らかに，国民学校時代の桃太郎像を見ることができるだろう。

桃太郎が修身的徳目を身につけた理想像であるという考えかたは，はじめに述べたように，巌谷小波の桃太郎観以来の継承と見ていい。自由主義時代に侵略的だという桃太郎観を訂正しようとしているのが目立っている。桃太郎は，「正義」の持ち主であり，降参した敵に対して「仁恕」をほどこすにやぶさかでないという。つまり，鬼ガ島を侵略したのではなく，「八紘一宇」の肇国の精神にもとづいて，皇化をひろめるために，皇威にしたがわない悪敵を降参させるという理由づけがおこなわれる。当時の日本帝国主義が大陸進攻を合理化するために「八紘一宇」や「皇化」を唱えたことと，この教材趣旨が一致していることに注目していい。

つまり，皇国主義倫理の具象としてこの桃太郎教材が指導されるように要求されていたのである。そのことは，表現内容には，大きな変容が見られないとしても，文部省の提出意図に変化があったことを示しているのではないだろうか。

ちょうど，そのころの統制団体である“日本少国民文化協会”の某幹部が，「かつて山本有三が，桃太郎ばなしが侵略主義だから教科書教材としては不向であると批判したが，今日からみると，全然有三説が誤りであったことが実証されるではないか」と思う意味のことを発言した。すると，大部の委員たちが拍手して支持したことを，わたしは想起する。わたしと，吉田甲子太郎（明大文芸部長）だけは拍手しおくれたといった表情をしたのである。

このような状況のもとで，「国民的思考感動」の強調であった国民学校成立のとたんから「戦時体制の教育」に急速調をおびて大東亜戦争に突入することになる。そこでは“桃太郎像”は，「鬼畜米英打倒」のため帝国主義侵略軍を象徴することになったのは，皮肉なことであった。戦後は，一転して鬼ガ島の鬼にたとえた，米英が，日本の戦後処理をするのである。すると，鬼ガ島の鬼たちが日本（桃太郎の国）を征伐したような結果となったのである。降参したのは，鬼の大将ではなく，実は桃太郎自身であったという，結果になったというべきである。鬼ガ島征伐で大勝利して宝物を握ったのは誰れなのかという設問していいと思う。

この間のいきさつを，後述の“プロレタリア児童文学における桃太郎像”と比較してみてほしいのである。逆説的であるということにおいては共通性をもつのである。

(4) プロレタリア児童文学における“桃太郎”

昭和9年，“思想問題に関し生徒児童の教育の任にある者，其の他教育関係者の注意を促し警戒の資に供する

目的を以て編纂した”というプロレタリア教育の教材”（文部省学生部編）（注1）は，当時発禁処分となった書籍・雑誌の内容を詳細に引例し紹介している点で，貴重な資料性をもつものである。

この書で“プロレタリア児童文学”をとりあげたなかでつぎのような記述がある。

“童話について云へば彼等（プロレタリア児童文学者）が我々に古くから伝はってゐる「猿蟹合戦」「桃太郎」「足柄山」等のお伽噺や「獅子王と蟻」の如きイソップ物語を巧みに改作している点が目に附く。児童はお伽噺やイソップ物語を好み然も是等のお伽噺の内容解説はどうにでもなるのであろうから其の利用は百パーセントの効果がある。階級的教員は是等の物語を見逃さないのである。”P435

教材例として“少年戦旗”（注2）“ピオニール・トクホン”（注3）“ピオニールの友”（注4）“児童問題研究の付録「子供新聞」（注5）“ピオニール夏休み帖”（注6）“新興教育”（注7）“赤いチョーク”（注8）“全農ピオニーロ夏季教程下級用”（注9）“小さい同志”（注10）“県村ピオニール・子供新聞”（注11）“無産者新聞・コドモのせかい欄”（注12）“プロレタリア芸術”（注13）“前衛・コドモのページ欄”（注14）等から作品があげられている。“桃太郎”に関しては“少年戦旗”の“その後の桃太郎”（坂梨光雄）と“鬼征伐の桃太郎”（本庄陸男）（注15）“面目玉をつぶした話”（光成信男）があげられている。“童話運動”には“桃太郎征伐”（黒板平八）が載っている。これらは，当時のプロレタリア児童文学における“桃太郎”の代表的な作品と見ていいと思う。

童話・その後の桃太郎　（昭和4年）

鬼が島へなど，とても一人では行けぬと思ったので，桃太郎は犬や猿や雉やそのほか大勢の者を雇って出掛けたのでした。

如何に鬼が強いといってもこんなに大勢で不意に島に乗り込まれたのではたまりません。金，銀，さんご，綾錦，何もかも取られてしまひ，中にはあわれな死に方をした者もありました。

桃太郎はきび団子半分づつで其日雇った犬，猿，雉などに宝物を山のやうに積んだ車を引かせ，えんやらや，えんやらや，とばかり帰ってまいりました。

“まるでわしは王様だ”

桃太郎は先頭に立ってあるきながらかうつぶやきました。馬も牛も猫も大きな銀杏の木もこの美しい行列にみとれました。いぢ悪い烏などは“何かあー，何かあー”といって欲しくない風をしましたが，やはり杉の木の上で大判小判を見ると，あの大きいくちばしを欲しさうに突き出さない訳にゆきません でした。実際この行列の中に雉が居なかったなら，烏は飛んで行って黄金の光りでギラギラする大判を一枚取った事でせう。この行列の中には熊蜂も這入っていました。熊蜂はこの宝物を一つでも盗んだ奴は刺し殺してやるぞといったりきみ方をして歩きました。

“おいらの先祖は昔金色に光っていたといふ歴史があるが，あれを一枚ロにしたらおいらだってさうなれるのになあ”烏は残念そうに云ひました。

エンヤラヤ，エンヤラヤと僅かづつ進んでゐた宝の車も，その日の夕方になると，おぢいさんやおばあさんの居る桃太郎の家に帰り着く事が出来ました。

おぢいさんおばあさんは言はずもがな，村の人々もみんなで迎へてくれました。そして誰もかれも桃太郎にあいさつをしました。

雇はれた犬，猿，熊蜂，雉などが宝の車を桃太郎の家に運んで宝を床の間にかざりつけたとき桃太郎は，雇った一同に向ってあいさつをしました。

“やあ，それでは皆さん，御苦労でございました。今度は又竜宮城に乙姫様を取りにゆくからその時もはたらいて下さい。そのときも間違ひなくきび団子を半分づつあげるから。”

一同は自分達みんなで戦って得た宝物であるから少しづつ分けてもらへるだろうと待ってゐたのですが，フトこんなあいさつをされたのでめんくらひました。

“それではおいとまします”といひは，いったものの猿さんなどはあの赤いお尻が畳に食いついて離れないやうな気持でした。然しなんといっても一同はその日きび団子半分づつで雇はれたのでしたから仕方がありません。“それでは，それでは”といってみんな帰ってゆきました。

みんな帰った後でおぢいさんが，桃太郎にたづねました。

“桃太郎や，何故お前はみんなを帰してしまはないであれを家来にして，お前がその王様にならなかったんだい？”

すると桃太郎は

“私も一時さう思ったのでしたが，さうするには毎日きび団子がたくさん入用ですからね”と答へました。

おばあさんは，この利口な桃太郎の言葉に感心しました。

☆　　☆

数ケ月の後，桃太郎から犬，猿，雉，熊蜂などに使がまゐりました。

“明日から竜宮に乙姫様を取りにゆくから来て呉れ，今度はきび団子を半分ぢやない一つづつあげよう”といふのでした。

で皆は犬さんの家に集って相談しました。といふのはこの前のときに宝物の割り前を呉れなかったのが不平の種になって居たからでした。

“俺はもう三日飼はれ三年の恩は知りたくない”と犬が云ひました。

“これから，ほんとうの心で猿犬相ひ和しやうね”と猿がこんな酒落をまじめな調子でいひました。

“俺は武器をもってゐる”と熊蜂がどなりました。

雉は鳥帽子の羽を逆立ててゐました。

そして一同は次のやうな宣言書を作って，桃太郎におくりました。桃太郎が竜宮城へ乗りこんだといふ話を聞く事が出来ないのも，一同がかうして桃太郎に反対したからです。宣言の事はよく分りませんが，おほよそ次のような事が書いてあったさうです。

宣　　言

1. 俺達は他国との争ひをやめる。
2. 俺達の働きで得たものはみんな俺達のものだ。桃太郎のやうに俺達の働きで得たものをすっかりせしめてゐながら，きび団子で雇ったからなどいふ理屈をいふ奴に絶対反対する。
3. 好きでもないお姫様を無理に取る事など，これ又絶対反対だ。俺達はさうした戦ひの為に従軍しない。

桃太郎はこの返事を受け取ると，びっくりしてこの村を逃げ出したさうです。

<昭和4年7月号・坂梨光雄>

この逆説桃太郎童話の“桃太郎像”は，つぎのような性格をもっている。

(1) 労働者を低賃金で雇庸関係を結び，不当に利潤を独占する資本家である。

まず，キビ団子を半分しかやらない。宝物は全部桃太郎が占有してしまう。利潤を配分しようとしない。家来にして常時雇っておくと，給料(キビ団子)が要るから，しごとのある時に臨時募集して労働力をかり立てようとする。その考えを欲ばりばばあが“利口”だとして感心する。桃太郎は“強欲非道”な悪地主であり，犬，猿，雉，熊蜂などは，民衆を，農民を，労働者を象徴する。かれらは，ひとりびとりは善良でお人よしであるのに，対照させている。当時のプロレタリア児童文学にみられる“地主をやっつけろ!”の対象像となっている。

これと対極的位置を占めるのは，小波の“桃太郎像”である。天津神の命を受けて誕生した桃太郎は武将でありその家来たちは，身命をかえりみずに戦う忠臣であったからである。またここでは，搾取者桃太郎を表現するためにキビダンゴを半分ずつで雇うことになっているし，第2回の遠征（竜宮城へ）の際は，桃太郎自身が2倍に賃上げ（ダンゴ一つ）をして雇おうとするが拒否される。

桃太郎噺が，まだ完全に子どもの昔噺にならなかった明治期以前にあっては，“一つはやらない半分やろう”がおこなわれていた。これは，主な口承者であった民衆の生活の苦しさを投影したものと解釈される。また同時に，封建時代における権力者たちが，農民に耐乏の生活を強制させて来たかを反映しているものとも理解できることばである。

(2) 帝国主義的侵略者であり，掠奪者である。

鬼ケ島という他国に不意をついて戦争をしかけて，征服してしまう。敵とする理由もないし，“鬼”もこの表現に関するかぎりにおいては，悪鬼とも思えない。いわば異国人や異民族にすぎない。

そしてこの侵略には，“とても一人では行けぬと思い……大勢の者を雇って出掛ける”ことになる。一鳥二獣だけではものたりないから“武器”を象徴する“熊蜂”を加わえたにちがいない。そればかりでなく“こんなに大勢”（大衆）を動員しなければ，桃太郎の侵略が成り立たないわけである。

この第一次侵略に成功した桃太郎は，いい気になって，第二次侵略を計画する。これが竜宮城のオトヒメ様の掠奪計画という設定になる。が，労働者の団結によっ

て，資本家・搾取者・侵略者桃太郎の敗北（びっくりしてこの村を逃げ出したそうです）となるわけである。さし絵も，労働者ふうな犬・猿・雉が大きく描かれ，桃太郎は日本一の旗をかついで一目散に逃げていくすがたが小さく描かれているのである。まさに，労働者の勝利の願望と，プロレタリアートの戦いを志向させようとする。

竜宮城進攻に際して，犬・猿・雉・熊蜂等の労働者は団結して，“宣言”を発する。この宣言の内容は，第1条は，平和主義・反侵略主義。第2条は，共産主義。第3条は反掠奪主義・反戦主義の思想を表現する。

カラスの登場や“犬猿の仲”“犬は三日飼われるとその恩を忘れない”などを風刺をとりいれて，ユーモアを織り込んではいるが公式主義が，骨ばって見えすえていることはおおいがたい。

童話・鬼征伐の桃太郎

鬼征伐した桃太郎の，本当の話を知ってゐますか。今日は本当の話をします。

大きくなるにつれて桃太郎は，働いても働いてもこんなに貧乏してゐる自分たち百姓といふものについて，始終考へてゐました。苦心さんたんして作った可愛いいお米は，小作米小作米と云って，地主がどんどん持っていってしまふ。

実際今年などは，食ふものさへ殆どなくなってしまひました。桃太郎の村の百姓（今で云ふ農民ですね）は小作米を取りに来る地主の奴に“鬼だ。鬼だ。”と蔭口をきいてゐます。鬼に違ひないと桃太郎も思ひます。すると鬼なんか早く消えてなくなればよい。なくなってしまえばよいのだ！　或日おぢいさんとお婆さんに桃太郎は相談しました。

“この世の中をよくするためには，どうしても，あの鬼を退治しなくちゃ駄目だよ。俺はこれから退治に行って来るよ。”

二人の年寄りは，これを聞いて大喜び。それもその筈でせう。長い間何十年も生血を搾られて来た憎い鬼地主でしたから。そこで，“全くだ。全くだ。”と云ひ乍ら“腹が減っては戦さが出来ぬ”と云ふわけで，早速黍団子をつくり初めました。お婆さんは考へ深く黍団子をまるめながら云ってきかせます。

“なう桃太郎や米をつくり乍ら，黍ばかり食はなならんやうな，こんな世の中が又とあらうかいな。百姓の作った米を取り上げてたらふく食ふとるやうな奴は，この世の地獄の鬼ぢや。たたき×（伏字）ママしても飽き足らんわい。”

“安心しな，お婆さん。そんなに何時までも苦しめてはおかんからね。さあ，出かけよう。

この世の中の，正直で働き者の自分達百姓をこうも虐めてゐる鬼地主を退治する——といふ桃太郎の出発は，田圃で働いている者達にどんどん拡がつて行った。さあさうなると，

“なるほど，仏様や神様にお願ひしたのでは屁にもならぬ。自分で行って，悪い鬼地主を叩きのめすべきだ。”

と，まるで盲目の眼が開いた様に勇み立った。“よし，俺も行くぞ。”“俺も行ってたたきのめして呉れる”と捻り鉢巻きに鍬かついで，田圃の中から次々と集まって来ました。人間でないやうなひどい生活をしてゐた貧乏な猿吉や，犬次郎や，雉助などが先頭でした。そして彼等は口を揃へて

“憎い鬼奴！今日こそ敵打だ”

“見ろあんな大きい家にゐやがる。”

“鬼が島でふんぞり返ってゐやがる。”

“あれも皆，俺達の××（伏字）ママを搾って造ったのだ。”

“もう容赦せぬ。”

桃太郎は腰の黍団子を取り出して，みんなに分けて食ひ乍ら

“同志！この眼の前の鬼が島をぶつつぶすことが出来なかったのは，俺達百姓が団結しなかったからだ。俺達は団結すれば何んなことでも出来る。ね，さうだろう。”

“全くだ。”“実際その通りだ。”——

黍団子を食ひ戦闘準備ととのへたのです。

鬼地主は，一段高くなった地面の上に，大きな屋敷をつくり，高い塀をめぐらしてゐました。何か人に見せられない程の悪いことをしてゐる証拠に，百姓達を寄せつけないのです。だから村の百姓は，何時の間にか“鬼が島”と云ふ様になりました。

“今に見ろ！俺達はあの日当りと風とほしのよい大きな屋敷を共同倉庫にするぞ。”

“ウン。いい考へだ。もともと俺達のものなんだからな”

“さあ，やっちまへ！やっちまへ！一時だって生かしときや害悪だ。”

“ロシアでは地主も金持ちもいないで，みんな安心して働いてるちうじゃないか。”

すると桃太郎が

“そうだ。百姓と労働者とで，地主と金持ちを残らず退治したからだ。”

“そらゆけっ!!”

かう解ってしまへば，一時だってぢっとしてゐることは出来ない。えらい元気で皆は団り合ひました。矢でも鉄砲でも来い——と，まさにその意気天をつくほどです。声を揃へて，はつらつと歌ひ出しました。

米麦つくる百姓は
気がやさしくて力持
鬼の地主を討たんとて
腕組み合はせ，いまぞいく……

鬼地主の権左は驚いた。今迄虫の様だと考えていた百姓が，歩武堂々攻めて来たのです。蒼くなって，何しろここだけは逃れようと，急にぺこぺこ頭をさげ“どうか，許して呉れ”とあやまり出しました。これを見た百姓が，ちょっとたぢろぐと，ニヤッと地主が笑ひました。さあ，それを見て百姓は叫び出したのです。

“だまされるな。だまされるな。”そして

“お前の土地はみんな百姓によこせ！”

“俺達は鬼をどうでも退治するんだ。”

“今日は生命を貰ふんだ”

“さっさと消えて失せろい。”

“斬れッ”と雉助が叫ぶ，猿吉が眉間を殴る。犬次郎が腹をふみ潰す。

それから，金銀財宝はみんな取り上げて百姓の共同保管にしました。それから，この村の人は安楽に暮すことが出来るやうになりました。この村の人は，だから世界中の百姓に向って云ってやります。

“世界から地主と金持ちを，たたき出してしまへ！”

ところで，あなた方は，桃太郎の話をとんでもない風に聞かされてゐる。これはまだ地主や資本家が居るからです。

地主や資本家は本当のことを話されるのが，とても恐ろしい。それもその筈です。あなた方は百姓や労働者の子供なんですからね。そこで学校の先生に嘘を教へろと，鬼奴が云ひつけるのです。遊んで威張ってる奴を早く無くしてしまひませう。みんなで腕を組んで……。

<昭和6年5月号・本庄陸男>

この作者，本庄陸男(1906～39)は，長編“石狩川”の冷徹なリアリズムを残こしたプロレタリア文学者である。この“鬼征伐の桃太郎”は，プロレタリア文学運動家の側面が露出して，形象化の不足が目立っている。これでは子どもがついていかない。

前に見てきたように，国語教科書によってひろく読まれて定着を示してきた“桃太郎”のイメージを破壊しようとする。“本当の話をします”こちらが“真実”であると子どもにアピールをこころみている。

坂梨の桃太郎は，本話のすじを，子どもたちが理解していることを前提にして，物語を運んでさらに発展していくが，本庄のは全面否定的な内容をとりながらも，キビ団子——鬼退治——宝物とりという形式にはめこんでいる。

前者の“鬼”は異国にいるが，後者の“鬼”は，じぶんたちの同じ村に住む地主である。前者では，桃太郎は農民の敵であるが，後者では，桃太郎は農民の味方として描かれ戦闘的である。資本家を倒すための団結を声を枯して呼びかけている感じである。この桃太郎像は社会革命のリーダーとして描きあげられる。

共通しているのはマルキシズムの公式的図式を桃太郎に托して子どもたちに啓蒙しようとする意図がある点である。児童文学としての形象性をかえみる余裕がなかったからでもあったろう。うるおいも感動のふかさもかえりみられずいきり立ったイデオロギーのおしつけが目立った。これは，初期的なプロレタリア児童文学一般に見られる特徴でもあった。つまり階級意識の自覚や階級闘争への志向を，観念的に注入することが，かえって勤労階級の子どもたちの心をつなぎとめることを拒否する結果をみちびく。

ギニヨール脚本・桃太郎征伐　（黒板平八　昭和4年）

(1)

陽気な鳴物

猿——豊年ぢや，豊年ぢや，キビ畑も実ったわい。一と踊りしようかな。アラエッサッサ（猿踊る）

今年ァ豊年万作だ。

明日はおいらの稲刈りだ。

裁判所の来ぬまに刈ってしまお。

コラコラ

スタコラサッサ

猿——それからどうだったかな。忘れたぞ。ああ何でもいいやれ，やれ，踊れ。

歌は下手でも，稲刈リァ上手

小束にたばねてちょいと投げる

コラサ，コラサ

桃——おい，猿助いい景気だな。

猿——ヘッ，いやな奴が来やがったな俺がいい気持になって居るのに，すっかり場こわししゃがる。

桃——時に，今年はなかなか豊年ぢや。おれもキビダンゴをシコタマ食へるといふもんだ。

猿——ヘッ，桃太郎の旦那もキビ畑をお作りになったんですかい。

桃——こりァみんな俺の畑ぢゃねえか。だからこのキビは皆んな俺のもんぢや。早速貢を持って来い。

猿——桃太郎さんそりァ何おっしやいます。こりァ，わっちが作ったキビです。わっちの作ったものァ，わっちのもんです。遊んでゐなすったあなたのものではございません。

桃——何だと，もう一度言ってみい。

猿——ヘッ，ぢゃ抑せに従ってもう一度申しやす。わっちの作ったものァわっちのもんでがす。それをとるやつァ泥棒でがす。

桃——この野郎！　俺が泥棒だって！　この日本一の桃太郎が泥棒だって！

猿——ヘッ

桃——へだと，物知らず目，鼻のアカかっぽじって聞いておけ。俺は日本一の桃太郎だ。だから地面はおれのものだ。

猿——ヘッ，ヘッ……。畜生，現に畑を作ってゐるわっちに相談もしないで，いつのまに，そんな筋道の通らない法律を作りやがったんだ。豊年だといふのに，今年の冬もまた芋ばっかり食ってゐなくちゃならねえのか。アア俺ァ悲しい。涙が出る。泣きたい。アンアンアン。ワーァァア。（泣声に合せて鳴物）

(2)

（静かな鳴物）

桃——お爺さんお婆さん，鬼ケ島へ鬼征伐に行って来ます——と言って出て来たものの，実は猿助からとったキビダンゴをシコタマ食ったんで腹下しで朝から晩までビチビチシャーとやったもんだから，腹がだるくてだるくて，この調子では戦争が出来さうもない。ああ，また，ビチビチシャーだ。ビチビチシャー，ビチビチシャー。お婆さーんウンコをたれたお婆さん助けて——オット，猿助がやって来たぞ。

（猿出て来る。）

猿——ああ，お腹がペコペコだ。もう芋もない。豊年だといふに，何てことだ。これもみんな桃太郎奴が，わっちのキビを取上げたからだ。何だか，いやに臭いぞ。臭い，臭い。とてもウンコ臭い。

桃——こりァいい思付だ。猿助奴，腹をすかしてゐやがるから，キビダンゴの一つもやったら直ぐ家来になるだろう。実を言うと俺は鬼がこわいんだ。それだのに，今ビチビチシャーをやったばかりだから，トウテイ鬼に勝てさうもない。だから猿助をだまして家来にして俺は後にかくれて，サイハイを振ってゐることにしよう。猿助が鬼に勝てば，宝物はみんな俺の懐へ這入るのだ。若し負けたにしたところで殺されるのは猿助で，俺は逃げさえすればいいのだ。

猿——ああ，桃太郎の旦那ですか。いやにウンコ臭いお天気ですな。一体どうしたんでせう？

桃——ああ，お前か，猿助か。丁度いいところで会った。これから鬼ケ島へ鬼征伐に行くところなんだが，俺はキビダンゴを余り沢山たべたのでビチビチシャーと，オットこんなことまで言ってしまうんぢゃなかった。

猿——あまりキビダンゴを沢山お食べになったので，あなた様がウンコおたれ遊ばしたといふ次第で。

桃——いやいやさうぢやない。これから鬼征伐に行くんだが家来になれ。

猿——成程，臭い訳がわかりました。結構な御身分で。私なんざ，お蔭様で腹がペコペコで。時にお腰にあるは何でごわす。

桃——いやいや，さうぢゃない。俺の家来になれと言ふのだ。

猿——いやいや，お腰にあるは何でごわす。

桃——これか，キビダンゴだ。

猿——それぢや，あなたはビチビチシャーだから私が皆んな食べませう。

桃——馬鹿！　たとへ，俺がビチビチシャーだとしても皆んなナンカやれるもんか，一つだ。一つはやれぬ半分だ。半分や

るから家来になれ。

猿――何だ！　ケチな桃太郎野郎だな。が仕方がない。俺ァ腹がペコペコなんだから。

（ダンゴをもらって食ふ。）

猿――ウンコたれの家来になって戦争に行くのもあまりいいカッコウぢやないなァ。

桃――ビチビチシヤー。歩くと尻がぐちゃぐちゃして気持がわるい。

猿――臭い，臭い。

（鼻をかくす。）

(3)

（サワガシイ鳴物）

桃――いよいよ鬼ケ島だ。

猿――ここが鬼ケ島ですかい。

桃――さうだ。ビチビチシャー

猿――ビチビチ大将，またウンコですかい。やりきれないな。

桃――馬鹿！　そら，鬼が出た！　進め，進め――（逃げ腰になる）

猿――あれが鬼ですかい。成程，赤い顔してゐますな。

桃――ノンキな事を言ってゐないで，進め，進め――（逃げる）

猿――わっちばかり進めと言ってあなたは逃げるのですかい。

桃――お前は家来だから戦争するんだ。おれは大将だから命令するんだ。ぐづぐづ言はずに進め！

（鬼出て来る）

異人――あなたは外国人さんですね。見物においでなんですか。

猿――あなたは誰れですか？

桃――そいつが鬼だ！　やっつけろ。

異――私は鬼ではありません。人間です。

桃――そいつが鬼だ！　やっつけろ。

猿――やってもいいですか，桃太郎さん。

桃――やれ。

（猿，異人をなぐる）

異――どうして私をなぐるのだ！　俺は鬼ぢゃない。

（なぐり返す。猿負けさうになる。）

桃――猿助が負けさうだぞ。今のうちに逃げたが勝ちだ。

猿――やったな！

（大乱闘。ついに猿が異人をおさえつける。）

猿――これでもか。これでもか。

異――まいった。降参，降参。

猿――ぢゃ宝物を出すか。

異――出します，出します。

桃――大勝利だな。これで俺の懐へ宝物がフンダンに這入こってもんだ。

(4)

猿――桃太郎さん，この宝物を半分あなたにも分けてあげませうね。

桃――馬鹿野郎，宝物は全郎俺のもんだ。お前には，はじめにダンゴをやってあるぢゃないか。

猿――だって本当に戦争したのは私です。

桃――お前は俺の家来ぢゃないか。俺のために戦争するのは当前だ。

猿――何だ！　ダンゴ半分ポチで，俺を使ひぱなしにしようてのか。もうわかった。奴らの戦争てこんなもんだな。（ナグル）

桃――猿助まて，まて。また鬼が来た。進め……進め！

猿――アホーこけ！　お前のために二度と戦争なんかするものか。俺のキビを盗みやがった泥棒め。（ナグル）

異――さうだ，さうだ。猿助さんの言う通りだ。

猿――あっ，鬼君か。君は俺の意見に賛成してくれるね。

異――さうとも。さうとも。俺はお前の味方だ。兄弟だ。一緒になって桃太郎野郎をやっつけよう。

猿――鬼君も加勢してくれるかね。さあやっつけよう。

（二人で桃太郎をケルナグル）

桃――降参，降参。

異――猿助君，君は俺を鬼君と言ふが，鬼ぢゃないんだよ。君は俺の後からばかり見てゐるからいけない。

（クルリと回る。とただの外国人）

猿――何ーだ。ただの外国人さんか，お隣りの南京さんぢゃないか。

異――さうだとも，さうだとも。

猿――桃太郎野郎ひどい奴だ。わっちのキビを盗んでビチビチシャーといふ程食ひやがって，おまけに君を鬼だなんて言ひやがった。（ナグル）

桃――降参々々。

猿――カンニンするものか。地球の外へ飛んで行きゃがれ。

異――これで悪者が居なくなった。

猿――この宝物はお前に返すよ。

異――ありがたう。そしてキビ畑はお前のものになったんだ。

猿――こんな事とはじめからしっておれば，戦争なんかしないで，はじめから二人一緒になって桃太郎をやっつけてしまったのに。

異――だが万歳だ。猿助さん万歳！

猿――南京さん万歳。　（終）　<昭和4年11月号>

キビ畑をつくって収獲しているサルのとこへやってきた桃太郎は，ここではドロボウ扱いにされている。“極悪非道”の図式的な“地主野郎”として象徴される。サルは，弱い小作人を代表する。実質的には犯罪者である桃太郎は食いすぎて下痢を起こすという不潔さが悪どく表現される。その上に，桃太郎は臆病者であり，卑怯者になっている。鬼は外国人で，かれは，なにも悪いことをしていない。それなのに，桃太郎は宝物を強奪する。宝物の分配も，お前に賃金をやって雇った家来なのだから，この利潤は全部資本家であるわしのものだという公式主義が述べられる。そこでサルと鬼が協力して桃太郎をやっつけて，逆に降参させる。鬼といわれた外国人は，隣りの南京さんという中国人であった。

これでは，児童文学などという範囲にいれられない駄作ながら，観念的には，当時の“改革的プロレタリアート育成”の方針に対しては，忠実だったと言えるかもしれない。到底実演の可能性もないことをも計算にいれて，露骨な憤激をぶちまけているとしか思えない。これこそ“下痢”（ストレス解消）的作品といわなければならない。

このような初期的プロレタリア児童文学が，内部批判を誘発したことは容易に想像できる。当時のプロレタリア作家群が，帝国主義化が加速度をはやめてくる状勢のもとに，緊迫感をいだき，対比的に急進性をもった時の一種のあせりでもあったろう。つまり，未組織大衆児童を切り離す結果をみちびいたことに対する批判が出てくるのも当然といわなければならない。このことが，後続する“生活童話”の成立とつながっていくと思われる。

プロレタリア童謡の第一人者であり，プロ児童文学の理論的指導者であった槙本楠郎は，子どもに初歩的イデオロギーをあたえようと考えるのは，誤りで，“革命的プロレタリアートのイデオロギーへと，急速に生長発展しつつある，革命的プロレタリア児童のイデオロギー”を内容とすべきであると規定した。(注16) この理論を受けた児童文学実践のひとつが本庄の桃太郎ともみられる。坂梨の桃太郎は槙本発言の前年であったからゆとりがみられるのだろう。

その槙本が，4年後（昭和9年）には“プロレタリア的児童文学は，その意図は大体に正しかったにも関らず，全然その方法を誤って，誘導の代りに強要したかの感があった。……吾々は今，おそ蒔きながらも，やうやく厳正な自己批判の出来るところまで生長して来た…”(注17) と述べるようになる。その意味で，これらの“桃太郎像”は不安定な時代を象徴するものである。第2次世界大戦後の富田博之の児童劇“桃太郎”が民衆の味方としての英雄に扱われているのに糸をひく。

プロレタリア児童文学は，大正期の“ひよわな童心”という超階級性・非社会性を打破する新らしい問題を提起した。勤労階級の子どもに対する階級的教化を目ざしたものであった。そこでは，従来の“桃太郎像”は，階級的視点から，新たに造型される。イヌ・サル・キジの戦闘力・労働力を搾取する権力的資本家像として敵として描くか，あるいは，勤労大衆の英雄として，味方の指導者として描くか，いずれにしても，“階級的教化”の手段として，利用されている。

この点は，戦時中，軍国主義者たちが“鬼畜米英”と叫んで，“桃太郎”を皇軍になぞらえた利用のしかたと方法的には同じことである。

プロレタリア児童文学の桃太郎が出現した時点で，すでに軍国主義的桃太郎がしだいに巨像に成長して，階級的桃太郎像を弾圧するのである。

（注1）　プロレタリア教育の教材　文部省学生部編　昭和9年3月刊　市販せず思想取締り関係に配布した出版物。

（注2）　“少年戦記”　昭和3年5月～同4年4月の“戦旗”

の附録として昭和4年5月創刊，昭和5年6月より新聞型に変る。同10月から翌6年4月まで当局の取締り厳しく休刊となる。昭和6年5月再刊し，同12月号（“婦人戦記”臨時増刊として終刊号を出す）をもって廃刊。各号発売禁止。

（注3）（注4）（注6）（注7）“ピオニール・トクホン” 昭和5年9月18日，プロレタリア教育確立を目的として創立された“新興教育研究所”が，翌年11月大衆化活動方針に切り換え“日本プロレタリア文化聯盟”（コップ）に加盟しプロレタリア教育教材として昭和7年2月10日謄写刷“ピオニール・トクホン”第1輯を発行した。第3輯（同年5月5日）からは“ピオニールの友”と改称。同年8月3日に“ピオニーロ夏休み帳”を発行した。新興教育研究所が同年8月25日解体して，“新興教育同盟準備会”となってからも“ピオニールの友”は第7輯（昭8年3月）まで発行した。各号とも発売禁止処分となっている。

（注5）“子供新聞” 昭和8年7月“新興教育同盟準備会に属する東京帝大の学生が中心となって創立した“児童問題研究会”（同大学のセッツルメント内）の機関誌“児童問題研究”が，付録として“子供の新聞”（定価1銭）を発行した。至昭和9年2月。6回発行している。これは発禁にならなかった。

（注8）“赤いチョーク” 新興教育系の地方支部にあたる宮崎支局の機関誌。そのほかにも“ひびき”（福佐支部）などがあった。

（注9）全国農民組合青年本部から，上級用・下級用の二冊が発行されている。昭和6年8月16日。

（注10）“小さい同志”プロレタリア童謡集，槇本楠郎・川崎大治編 自由社 昭和6年7月25日発行。このほか，単行本としては，童話集“なぜなの”ミューレン作荒畑寒村訳 無産社 大正15年12月，“小さいペーター”ミューレン作林房雄訳 暁星閣 昭和2年7月，“真理の城”ミューレン作林房雄訳 南宋書院 昭和3年3月，“赤い旗”（プロレタリア童謡集）槇本楠郎著 紅玉堂 昭和5年5月15日，“金時計”パンテレィェフ作槇本楠郎訳 楽浪書院 昭和6年12月，“子供の脚本集”日本プロレタリア演劇同盟出版部 昭和8年6月12日などがあげられるが，いずれも発禁処分を受けている。

（注11） ピオニール活動支部県村（あがた）の子ども向き新聞。未詳。

（注12）“無産者新聞”当時唯一の無産階級の政治新聞が，大正15年6月12日第32号に始めて“コドモのせかい欄”が設けられ昭和2年1月まで継続された。これは新潟県下の小作争議に関連して創設された“木崎無産小学校”に刺激されてこの欄が設けられたと見られている。わが国最初のプロレタリア教育の教材といっていい。

（注13） プロレタリア文芸誌 昭和3年1月～4月

（注14）“コドモのページ”欄は，昭和3年1月～3月

（注15）“童話運動”新興童話作家聯盟の機関誌・プロレタリア児童教化雑誌 昭和4年1月創刊 石田茂編集 昭和4年12月終刊。“本聯盟は反資本主義的社会認識を有する児童文学作家より成り，真に児童を時代の悪弊より解放せんために生まる”と“宣言”している。前出“少年戦旗”の姉妹雑誌。

（注16）“プロレタリア児童文学の根本問題”槇本楠郎「新興教育」昭和5年11月号

（注17）“児童文学の新段階”槇本楠郎 昭和9年7月「新児童文学理論」昭和11年7月東宛書房刊 所収）

児童文学における童話の原話と再話の児童による鑑賞態度の比較研究*

資母小学校　久本智子**
神戸大学　芳賀純

I 問題

最近，児童図書全般に再話が氾濫している。日本における児童文学の再話は，勿論，現在に始まったものではなく，特定の作家による意図的な再話はなされてきた。(1) 例えば，明治時代には巌谷小波，大正時代には鈴木三重吉，昭和の戦前には楠山正雄によるものなどである。しかし，今日みられる再話は，特定の作家というより，あらゆる方面の児童文学作家が手がけているようである。

再話には，大きくみて，再話することにより原話の価値を一層高める場合と，反対に，再話することにより原話の価値を下げてしまう場合とが考えられる。前者の場合としては(2)，西郷竹彦氏がすぐれた方法とされる，ソビエトにおけるA・トルストイのロシア民話の再話をその典型とするものなどが一例であろう。すなわち，昔話には各地に類話が散在しているので，再話者は，それらの中から，現代に生きるテーマをもったものを選び，それを主軸として，他の類話の中から部分的にすぐれたところを取り入れ，これらをモンタージュして，一編の再話を創造するという例である。そして，前者に比べると，後者の場合に概当する再話の方が多く，又，後者の場合には，問題があるのではないかと思われる。こうした点について，西郷氏(2)は「本来，伝統としての昔話は，それ自身のきびしい形式，文体(語り口)，構造をもっている為，かってな再話は許されない。しかし，実際には，昔話の本質を無視した恣意的な再話がなされていて，今日，子どもの文学として提供されている絵本などの大半は，それに類するものである」と指摘されている。又，再話は，単に課外読みものだけに限らず，童話教材の面にもあらわれている。久米井束氏(2)は，現在の国語教科書にとりあげられている童話の貧弱さを指摘しながら，「わずかに，チビクロサンボとか，きかんしゃやえもんというようなのが新しい作品といえる。しかし，これらの作品も，原典とほとんど姿をかえるほどに省略や改作が行なわれて，その文学性を希薄なものにしている」と，教材での再話の問題をのべておられる。又現に，我々も，ある小学校の先生より，そうした話をうかがった。

再話が多くなされる理由としては，次のような事情が考えられる。まず，H・ワロン(3)が指摘するように，児童図書の発行者側における問題がある。すなわち，発行者は，児童図書の製造過程で，外部からの情報にあまり耳を傾けようとしない。著者や挿絵家の方も，多くは，子どもに対する認識が狭く，子どもとおとなの精神構造や欲求の違いを無視してかかる。そのうえ，著者と挿絵家との協調は，たがいに独立しようという意識が働らくため，必ずしもうまくいかず，テキストの解釈などで意

---

* A comparative study on the children's appreciation of a Grimm's Märchen and its adaptation.

** HISAMOTO, Tomoko (Shimo Primary School, Hyogo) & HAGA, Jun (Kobe University)

見のくいちがうことがよくある。こういうまずい協力体制をスムーズにいかせるのは発行者の命令以外にない。そこで，商業的基準が，児童図書の製作を全面的に支配するわけである。次に，そうした図書を推選する児童文学者や，実際，教材として用いる教師の側でも，児童文学に対する価値観，児童図書を児童に与える姿勢が一様ではない。例えばグリム童話の筆録者であるグリム兄弟が考えるように(4)，児童には全てありのままの自然を見せることが望ましいとする立場，一方，グリム童話原本を描写残忍の故をもって一部書き改めて翻訳された英訳本の序文を書くジョン・ラスキン(4)の考え方のように，児童は，日常，水晶のように透明な真理の世界に遊ばせることが望ましいとする立場などがあり，こうした見解の相違は今なお存在しているのである。そして，我々が目にしたかぎりで，内容的に省略，書きかえのなされている再話では，後者の意図が感じられた。すなわち，原話における人生の暗い部分，索漠とした部分，残酷そうな部分が，そこだけ省略されたり，ぼかされたり，望ましい姿に書きかえられているものが多いように感じた。こうした問題に加えて，又，課外読みものとして児童に買い与える父兄の，児童図書に対する認識不足や，無造作な選択などの問題もからんでくる。以上のような状況から，同一の題名の話でも，著者により，出版社により，少しずつ内容の異る再話が，続々出版されるものと考えられる。

児童文学についての心理学的研究は初期には Ch. ビューラー(5)によるものがあり，最近ではスミス(6)が研究法の1つとしてとりあげている。滝沢武久氏(3)も，「子どもの知的発達や審美的成長のためには，ぜひやらねばならぬ研究課題である。」と，その必要性をのべられる。こうした問題に対して，我々は，心理学的研究をしてきた(7，8)が，児童文学における再話の影響については，これまでのところ，調べられたものがないようである。そこで，今回は，特に，再話の問題をとりあげ，原話との比較のもとに，その影響を，発達差，男女差等から，研究してみたいと思う。又，今回は，世界的に有名な童話で，しかも再話の多いグリム童話の中から，T・H自身，書店で目にした「ヘンゼルとグレーテル」の再話の一つを用いることにし，この研究の為に，次の研究目的をたてる。

(1)原話と再話による人物についての理解の差

a　ヘンゼルについて

b　グレーテルについて

c　父親について

d　母親について

e　魔女（まほうつかい）のおばあさんについて

(2)原話と再話による感動場面の差

(3)原話と再話による好みの差

II　研究方法

1.　用いた童話テキスト

原話は，出来るだけ原文に忠実に訳すことを意図したもの(9)，再話は，内容的に書きかえがなされ，比較的児童によく読まれそうな本(10)の中から選び，用いた。この再話では，特に，登場人物の両親の人格が書きかえられる。すなわち，原話では，子どもへの愛情は深いが母親に言いまかされる父親と，子どもをすてて厄介ばらいをしようと考える継母を，父親，母親ともに，実の愛情深い親に変えられている。全体に，子どもにとって，残酷そうな部分が，省略や書きかえがなされている。

2.　童話の提示方法

同一学年，2クラスのうち，一方には原話を，もう一方には再話を与えた。テキストは，原話・再話とも，本文を別紙に写しとり，同一の表紙にするなど，出来るだけ同一条件のもとに，T・Hが全て読み聞かせた。又，同音異義の語句がないことも確かめておいた。そして，童話を読む前に，次のように説明した。「みなさん，『ヘンゼルとグレーテル』のお話を知っていますか。『ヘンゼルとグレーテル』のお話といっても，多くの人が色々なお話を書いておられるのです。そのうちでも，みなさんだったら，どのお話が好きか知りたいのです。今日はこれから，そのうちの一つのお話を読みますから，後

で，このお話をどう思ったか，書いてほしいのです。」このように，あえて調査の目的を児童に知らせたのは，この話は，両親が子どもをすてる内容であり，特に低学年に対する教育的配慮から，児童自身も，客観的に童話を聞くようにさせたのである。童話を読み聞かせた時間は，原話で約25分間，再話で約15分間である。あらかじめ，テープに吹きこんで読む速度を決め，調査においても時間を測ったが，ほとんど変らなかった。

3. 質 問 紙

内容は次の通りである。「(1)ヘンゼルはどんなこでしょうか」という質問形式で，登場人物５人について(1)番から(5)番まで問を設けた。(6)番は，「このものがたりをきいて，一ばんかんどうしたことは何ですか」(7)番は，「これと同じようなおはなしを，よんだりきいたりしたことがありますか」(8)番は，「このおはなしをすきですかきらいですか」の問を設けた。(1)～(6)番は，自由解答形式に，(7)番は，〔(イ)ある(ロ)ない(ハ)よくおぼえていない〕から(8)番は，〔①とてもすき②すこしすき③どちらでもない④すこしきらい⑤とてもきらい〕どれか，一つをえらんで○をつけさせた。

この質問紙を，童話を読む前に配布し，裏向けにさせておき，読み終えると表を向けさせて，やらせた。(6)番の「かんどう」ということばについては，「一番心に残ったこととか，いいなと思ったところ」と説明した。

4. 対象児及び調査の日時

神戸市内の中心部にある学校の一つ，御影小学校の２年生，５年生の各２クラス計164名（男子83名，女子81名）に対して，昭和42年10月上旬に調査を行った。

5. 結果の分析方法

人物について理解の差は，各人物に対する児童の感想の中から，要素的なもの全てをとり出し，傾向として似た要素は，その中でも最も多い要素の名でまとめた。

（例） 頭がよい（頭がよい。かしこい。りこう。知恵がある，等）

二つの要素が切り離せないと思われる場合は，そのまま一つの要素とした。

（例） 本当はいい人だがちょっとわるい

又，色々な意味を含む「えらい」といった感想の場合には，児童の理由を参考にして判料し，「頭がよい」とか「妹思い」とかの要素に入れた。

Ⅲ 結果と解釈

登場人物についての感想は，全体的に，原話と再話により差がみられた。特に，父親については，２年の場合５％の有意差，母親については，２年５年ともに１％の有意差がみられた。お話のすききらいと，人物の理解には関係はみられなかった。次に，特に差のみられる父親と母親についての児童の感想をみる。

〔父親について〕結果は，表１のとおりである。２年の場合，原話の方では「子ども思いのやさしいいいおとうさん」が70％以上（特に女子の場合80％以上）で圧倒的であるのに対し，再話の方では「子ども思いのやさしいいいおとうさん」と「わるいおとうさん」（特に男子に多い）が，ともに40％前後を占め，全体を２分する。男女差としては，全体的にみて，女子は善い父親とみるものが多く，男子は善い父親と悪い父親の両方に分かれる。

５年の場合，２年の場合ほど差はないが，原話の方では「子ども思いのやさしいいいおとうさん」が一番多く，「いい人だがちょっとわるい」，更に「わるいおとうさん」と，各々５～６％の差でみられるのに対し，再話の方では「いい人だがちょっとわるい」が一番多く，約10％の差をもって，「子ども思いのやさしいいいおとうさん」と「わるいおとうさん」とが，ほぼ同率で続く。男女差も，２年に比べると，男女とも，原話と再話による差はほとんどない。女子は善い父親だが少し悪いとみるのが圧倒的で，男子は善い父親とみるのが一番多いが，次は悪い父親が続く。

以上のような父親についての結果を解釈すると，次のようになる。原話の方では，テキストでは，母親の悪だくみに反対できず，自らも，枯木にむすびつけた枝の音で子ども達をあざむき，捨てるという，はっきり，人間

表　1　父親に対する感想　（%）

要　　素	2　年		5　年	
	原話	再話	原話	再話
子供思いのやさしいいいお父さん	71	43	38	28
本当は優しいいい人だがちょっと悪い	8	14	31	39
悪いお父さん	10	38	24	26
かわいそう	4	—	4	—
そ　の　他	6	7	2	7
全　感　想　頻　数	49	28	45	46

的弱さをあらわした父親の表現であるにもかかわらず，児童は，それ以上に，話のずい所にみられる，親としての子を思う心情を明確に読みとったことが分かる。又，一方の母親の人格が，明らかに心の悪い継母であることからも，対照的に，善い父親とみる理解が多くなったこともあると思われる。一方，再話の方では，テキストで，「どんなおやでも，へいきで子どもをすてるおそろしいおやはいません」と，わざわざ強調し，森へ子どもを捨てる行為すら,「森へすてれば，木の実や草の実を食べて生きていくかもしれない」と考えたことにし，積極的な善の意義づけさえされている。しかし，後の「後かいし泣く」と矛盾をおこしているし，親が子どもを捨てるという，話の構成そのものとの間にも，原話の場合ほどの必然性がない。その為，全体に，児童の理解が不明確となり，再話の傾向から善い父親，話の筋からは悪い父親と，理解が分かれたと思われる。このことはすなわち，再話のねらいにもかかわらず，必ずしも，善い父親とばかりは理解されず，かえって再話により，実の両親が，単に貧乏だからといって安易に子どもをすてたと理解させ，ひどい親だと感じた児童もかなりいるものと思われる。

発達的にみると，2年では，原話と再話でかなり父親の理解に差がみられるが，5年では大差はない。しかし，5年の場合，結果的には似た傾向の感想となっていても，原話の場合の方が明確で深い。又，原話と再話では，原話の方が，やや，発達差が大きい。男女差としては女子は比較的善い父親もしくは少し悪いとみるのに対

表　2　母親に対する感想　（%）

要　　素	2年		5年	
	原話	再話	原話	再話
わ　る　い　人	90	30	94	30
本当は子供思いの優しい人だがちょっと悪い	2	24	2	37
子供思いのやさしい人	8	42	4	33
そ　の　他	3			
全　感　想　頻　教	48	33	50	43

し男子は，善い父親と，反対の悪い父親の両方に理解が分かれる。これは，女子の方が全般に理解力がある為か，男子の方が，善・悪どちらかに割り切ってみる傾向があるのか，はっきりしない。

〔母親について〕結果は，表2のとうりである。2年の場合，原話の方では「わるい人」が約90%で圧倒的であるのに対し，再話の方では，「子ども思いのやさしいいい人」が，42%で一番多く，次は「わるい人」が30%，「本当は子ども思いのやさしいいい人だがちょっとわるい」が24%と，大差なくみられる。男女差としては，原話の方では，男子は100%わるい人とみるが，女子の場合，それは約80%で，善い人とみるのも約17%ある。再話の方では，女子は善い人とみるのが一番多く，男子は，善い人と悪い人の両方に分かれる

5年の場合も，原話の方では「わるい人」が94%を占め，完全に感想が集中するのに対し，再話の方では，「本当は子ども思いのやさしいいい人だがちょっとわるい」,「子ども思いのやさしいいい人」,「わるい人」が，ほんの2～3%の少差で，3分する。男女差としては，原話の場合は，ほとんど差はないが，再話の方では，男子は悪い人とみるのが一番多く，女子では，本当は善い人だが少しわるいとみるのが一番多い。

以上のような母親についての結果を解釈すると，原話と再話では，理解に大きな差がみられる。原話の方では，テキストから予想される通り，圧倒的に「わるい人」と理解される。ところが，再話の方では，テキストでは，父親と全く同人格で，父親のところでのべたように，できるだけ愛情深い実の親に書きかえられている

が，子どもの理解は，父親の場合と同様に不明確なものとなり，必ずしも，全面的に善い母親とはみられず，全体に，善い母親，少し悪い母親，の全ての判断に大差なく分かれてしまった。

発達的にみると，原話の方では差はないが，再話の方では少し差がみられる。

男女差としては，全体的にみて，悪い母親とみるのは男子に多く，本当は善い人だが少し悪い母親とみるのは女子に多い。母親については，女子の方が，母親に対する理想的な観念がくずされにくいように思われる。

他の人物，ヘンゼル，グレーテル，魔女（まほうつかい）についても，両親の場合ほどではないが，原話と再話のテキストの差が，子どもの理解にも影響を与えていた。（表省略）

原話と再話による感動場面の差は，表（省略）のとうりである。これによると，「好み」の程度による差はあまりみられない。頻数の多い順に３位までを取りあげてみる。（　）内は頻数を示す。

２年（原話）①お菓子の家(10)　②白い鴨(5)　③グレーテルが魔女を殺す(4)の各場面（①は男子が多い）

（再話）①金貨をもち帰る(21)　②お菓子の家(9)　③白鳥(3)の各場面

５年（原話）①グレーテルが魔女を殺す(8)　②兄弟の助け合い(6)　③ヘンゼルが道じるしを落す(5)　③最後の父親との再会の喜こび(5)の各場面

（再話）①グレーテルがまほうつかいを殺す(13)　②お金をもち帰る(5)　③ヘンゼルが道じるしを落す(4)の各場面（①は男子が多い）

以上の結果を解釈すると，全体的にみて，原話の場合の方が，幅広く個性のある感想がみられる。これは，原話のテキストが，各場面，場面が，充実された上で話が発展する為と思われる。原話の方では，グレーテルが兄を助ける為に魔女をかまどにおしこんで殺す場面に多く感動している。これは，テキスト自体で，最も盛りあがりの場面となっていることから，その影響を受けたものと思われる。再話の方では，この場面は，２年では上３位までにはあらわれないが，５年になると，圧倒的に１位にあがってくる。このことは，テキスト自体，まほうつかいを殺す場面を，刺激少なく軽く書き流されている為，２年では感動が素通りしてしまうのが，５年では，表現に左右されることなく，構成上からの重用性に気づき，原話の場合と同様の面白さを感ずるようになるものと思われる。又，再話の方で，全体に，金貨や宝石をもち帰る場面に多くの感動しているのは，テキストの影響と思われる。

発達差としては，２年では，比較的，お菓子の家や，白い鴨(再話では白鳥)に助けられる場面に，すなわち，比較的，感覚的に楽しい場面に多く感動するのに対し，５年になると，グレーテルが兄を助ける為，魔女を殺す場面や，道じるしを落す場面など，知恵のある面，精神的な場面に多く感動する。

大きな男女差はみられないが，やや男子の方が，勇敢でスリルに富んだ場面に多く感動する傾向がみられる。

表３は，原話と再話による好みについての児童の感想の頻数である。

表　3　原話と再話との好み　カッコ内は（男・女）

好みの程度	2年		5年	
	原話	再話	原話	再話
クラス人数	41(21・20)	41(21・20)	39(20・19)	43(21・22)
とてもすき	25(14・11)	24(10・14)	16(6・10)	12(3・ 9)
すこしすき	6(3・ 3)	3(2・ 1)	10(9・ 1)	15(8・ 7)
どちらでもない	8(3・ 5)	9(6・ 3)	13(5・ 8)	15(9・ 6)
すこしきらい	1(0・ 1)	3(1・ 2)		
とてもきらい		1(1・ 0)		
無　答	1(1・ 0)	1(1・ 0)		1(1・ 0)

発達的にみると，５年の方が全体にこの話を好いている。しかし，「とてもすき」，「すこしすき」，「どちらでもない」が，ほぼ同率でみられる状態である。２年の方は，「とてもすき」という子が５年より多いが，又，「とてもきらい」という子までみられる。

又，原話と再話では，2年5年とも，原話の方が好まれる率が高い。その際，1％の有意差のもとに，2年の方が5年より原話を好んでいる。しかし，「とてもすき」の，再話との差は，5年の方が大きい。

男女差としては，2年5年とも，原話は，男子の方が好む率が高く，再話は，女子の方が好む率が高い。そして，再話の場合は，2年5年とも，「とてもすき」という率も女子の方が高いのだが，原話の方では，「とてもすき」という率は，2年では男子，5年になると女子が高くなっている。

又，表(省略)は，話のすききらいを，すでに似た話を読んだり聞いたりした経験の有無との関係でみたものである。これによると，すでに話を知っていることと原話・再話のすききらいとは，あまり関係はみられない。2年では30％の児童が，5年では，60％の児童が，すでに似た話を読んだり聞いたりしている。2年では，やや男子の方が多く，5年では，圧倒的に女子の方が多くなり，80％近くの児童が，すでに読んだり聞いたりしている。

以上の結果から解釈すると，5年では，この話そのものは，特にすきという話ではないがきらいではなく，2年より安定して好む。一方，2年では，5年より「とてもすき」な子が多いかわりに，「とてもきらい」という子もいて，好みが安定しない。これは，やはり，子どもが親にすてられる話であり，2年では善くも悪くもその印象が強い為ではないかと思われる。又，2年5年とも原話の方がより好まれたのは，原話の，かなりの真実味をおび起伏に富んだ内容が，美しく哀しいが単調である再話に比べて，より面白く感じたものと思われる。又，全体に，原話が男子に好まれ，再話が女子に好まれたのは，男子が，原話のスリルに富んだ内容にひかれ，女子は，再話の美しく哀しい内容にひかれた為と思われる。そして，この話は，2年ではやや男子がよく読んだり聞いたりし，5年になると圧倒的に女子が多くなるのは，2年では，構成のきばつさが男子の興味をひき，5年では，かなしいお話が女子にうけるのではないかと思う。

Ⅳ 結 論

内容において差のある原話と再話では，児童の理解にも差が出るのではないかとみて，人物についての理解，感動場面，及び話の好みから研究した。

人物，特に父親と母親の理解については原話と再話では，児童の理解に差があるとみた。具体的には，原話の方では全く悪い母親と少し悪い父親とみられ再話の方ではどちらも善い親とみられるのではないかとみた。

結果は，父親と母親についての原話と再話の理解の差は仮説通り，有意の差がみられた。しかし，内容的にみると，原話では，父親は全般に善い父親として理解され発達的には，2年ではそれが圧倒的であるが，5年ではやや批判的態度もみられた。母親については，仮説通り，発達差なく，悪い人とみられた。一方，再話の方では，父親・母親とも，善い親と悪い親との理解が半々に分かれた。発達的にみると，2年ではこの二つに分かれ，5年になると，両面をあわせた，善い人だが少し悪いの感想もあらわれ，すべての判断が大差なくみられた。他の人物についても，両親ほどではないが差がみられた。

人物についての感想全体をみると，2年の方がテキストの表現からの影響を受け易く，5年になると，理解が安定してくることが分かった。そして，2年では，善か悪かの類型的な理解をするのに対し，5年になると，やや複雑な大人の理解に近づく傾向がみられた。又，原話と再話では，原話の方が明確な理解を与え，発達により理解に深まりがみられたが，再話の方は，不明確な理解となり，発達差のあまり見られない画一的な感想が多くみられた。人物の評価を大きく左右するほどの男女差はみられなかったが，男子は，頭がよく勇気のある面を，女子は，やさしく愛情深い面を，よりとらえる傾向がみられた。

次に，原話と再話では，感動場面に差が出るのではないかとみた。すなわち，テキストでは，原話の方では，グレーテルが魔女を殺す場面が印象的であるが，再話の方では，その残酷さがぼかされ，こっけいな感にさえ描

かれている。結果は，やはり原話の方では2年5年ともに，明らかにこの場面に多く感動したのに対し，再話の方では，2年では，金貨やお菓子の家により強く印象をうけ，5年では，原話の方と同じ，グレーテルがまほうつかいを殺す場面に特に男子が，多く感動した。すなわち，原話の方が，感動場面が明確であるといえる。

原話と再話の好みについても差があり，2年では再話を，5年では原話を，男子は原話を，女子は再話を，より好むとみた。結果は，2年5年とも原話の方がより好まれ，2年の方が5年より好んだ。しかし，5年は全般に安定して好むが，2年ではまだ安定していない。そして，再話の方がややきらわれる傾向もみられた。男女差は，ほぼ仮説通り，男子が原話を，女子は再話をより好んだ。又，今までに似た話を知っていることと，原話と再話の好みには，関係はみられなかった。

以上のような結果をまとめると，次のことが言えるのではないかと考える。すなわち，今回用いた原話と再話では，原話の方を児童に与えた方がよい。原話の方が，低学年に対しては明確な理解を，高学年には，より深い認識を与ることが出来る。原話の一見残酷そうな場面や事柄も，しっかりした構成のもとに，物語に真実性，一貫性があるなら，児童には，大人が案ずるような害は与えない。ただ，そうした原話を与える際には，発達に則した適切な指導のもとに用いられることが望ましい。そうして用いられるなら，原話はより一層，児童にとって価値あるものとなるだろう。又，部分的な書きかえや省略による安易な再話は，児童の理解を不明確にし，話の面白さを減少させる恐れがある。指導者はこうした点をよく考慮し，つねに原話と再話をよみ比べ，より深い思想と明確な主題をもつものを選択し用いることに留意することが大切であろうと思う。

なお，研究方法としては，今後，次の点が問題となるだろう。

(1)童話の提示方法として，今回は調査者が直接読み聞かせたが，テープに吹きこむ方法，放送で一斉に流す方法，テキストを印刷し児童自身に読ませる方法など考えられる。

(2)調査対象として，今回は，小学校2年生と5年生で行ったが，幼稚園児から大学生まで対象とすれば，一層，発達による理解の差が明らかとなるだろう。

(3)再話の効果を研究するために，本研究ではグリム童話を用いたが，他の童話についても試みてみる必要がある。

—以上—

〔引用文献〕

(1) 西原慶一(1952)日本児童文章史，東海出版社。P385—.
朝田祥次郎，児童文学講義資料。P14—24.

(2) 阪本一郎，滑川道夫，波多野完治，室伏武編，現代読書指導事典(1967)第一法規出版株式会社。P184—196.

(3) 滝沢武久(1967)現代心理学と授業改造，明治図書。P138—

(4) 金田鬼一訳(1966)グリム童話集，岩波書店。第一冊P3—8，第七冊P229—235.

(5) Bühler, Ch. u. Bilz, J. Das Märchen und die Fantasie des Kindes. Johann Ambrosius Barth München. 1958.

(6) Smith. (1967). A Critical Approach To Children's Literature. McGrow-Hill. P2

(7) 中作恭子・芳賀純(1963). Semantic Differential 法による童話中の主要人物の意味把握の変化の分析，計量国語学，計量国語学会編

(8) 友常紀子・湯浅梨枝子・芳賀純(1963)児童の反応に基く童話の鑑賞過程の一分析，関西放送教育研究協議会，放送教育研究紀要Ⅱ。

(9) 関敬吾・川端豊彦訳(1965)グリム昔話集(1)，角川文庫。P114—126

(10) 土屋由岐雄(1966)グリム童話三年生，偕成社。P71—89

SUMMARY

One of the stories written by Grimm, "Hänsel und Gretel", was told to children, 80 from the second grade and 84 from the fifth grade. One half of the children (group A) were told the original translation while the other half (group B) were told an adapted

translation. Afterwards the children were asked to respond to questionaires in order to determine their understanding of the characters in the story, the most impressive scene, and whether or not they liked the story.

The children who were told the original had a good understanding of the parents in the story while the children who were told the adapted version did not always understand them well. That is, the former expressed that the father was somewhat of a bad man and that the mother was a very bad woman, while about one half of the latter thought that they were both good parents.

Concerning the most impressive scene, the group A's responses were centered on the scene in which Gretel killed the witch, while group B showed no particular interest in that alone but in several scenes. This shows that the original translation has stronger focal points than the adapted version.

Children in group A stated "I like this story" more than in group B,

In the study of this particular story, the authors concluded that the original translation would be better than the adapted translation.

絵本と子ども*

日本女子大学

阪本一郎　藤井真澄

堤淑子　荒井佳子

はじめに

この研究報告は2部によって成っている。第1部は，質問用紙によって，幼児の親に，どのように絵本を与えているかの実態等についての回答を求め，これを整理したもので，いわゆる読書実態調査の結果である。第2部は，実験的に，幼児にさまざまな絵本の絵を見せて，どのような表現方式の絵が子どもに好かれるかを検討したものである。このような研究手続はむかし牛島義友・矢部信一両氏によって試みられているので，およそその手続に従って，20年前の実態と比較することができるようにした。

第1部　子どもの絵本環境

1　調査

調査用紙は次の幼稚園に(東京以外は各10枚ずつ)送付して，園児の保護者に回答してもらった。

(東京) 愛育，こひつじ，恵泉，聖園

(名古屋) 柳城　(大阪) 聖愛

(神戸) 長田　(福岡) 舞鶴

以上大都市8幼稚園

(北海道) 桑園，めばえ，麻生明星，かおり

(青森) 青森長島，聖マリア

(岩手) 盛岡　(秋田) 秋田，大館

(仙台) 聖愛，ミクニ　(山形) 千歳，聖愛

(福島) 小高教会　(長野) 旭

(岐阜) 済美　(金沢) 北陸短大付属

(福井) 栄冠　(　堺　) 開花

(西宮) 岡田山聖　(倉敷) 竹中

(　呉　) 善隣　(松山) 親愛

(高松) みくに　(熊本) 神水

以上地方25幼稚園

合計34の幼稚園。回収率は約50%で，464枚であった。実施は昭和42年の6月。児童数は次のようであった。

年令	3才	4才	5才	計
男	39	96	108	243
女	32	78	111	221
計	71	174	219	464

ちなみに親の職業を，A群（高等専門的職業……教師・会社員・公務員・医師・研究家・技師等）とB群（その他）とに分けると，A群は395名，B群は105名であった。

2.　絵本の買い方

(1)　絵本の購入場所は，本屋が最高(49%)で，次が幼稚園経由(39%)で，この二つが大部分を占める。以下，デパート(9%)，おもちゃ屋(1%)，その他(3%)となっている。この順序は牛島調査と同じであるが，牛島調査には幼稚園経由が無い。職業群別に見ると，A群は本屋とその他（セールスによるもの等）がやや多く，B群は

---

*　Picture books with infants.

**　SAKAMOTO, Ichirō; FUJII, Masumi; TUSTUSMI, Yoshiko; ARAI, Yoshiko (Japan Women's Univ.)

おもちゃ屋とデパートとがやや多くなっている。しかし有意差はない。上記のように新しい傾向として幼稚園経由が3分の1以上を占めるようになっていることは，親の選択権が無くなっていることを示すように思われる。その反面に，信頼のできる逐次刊行の絵本がふえてきていること，販売ルートが改革されてきていることなどが考えられる。

(2) 最近1か月間に買った冊数は，2冊というものが最高(37%)で，3冊(25%)，4冊(13%)，1冊(13%)で，6冊以上のものが3%ある反面，0冊のものが4%ある。一般に月2～3冊ということになるが，月刊ものと単行本とに分けると，後者は少い。前述の購売方法と関係があるようだ。

(3) 買った絵本の定価は，したがって100～199円が50%を占めている。200円代のもの11%，300円代のもの16%，400円代のもの6%，500円以上のもの4%と，かなり高価な単行本が買われている。

(4) 買うときの選択は，親の判断(47%)，子どもの希望(30%)，先生のすすめ(14%)，よい本の目録(6%)などによっている。親の判断がもっとも多いことは牛島調査と同じであるが，それに無かった子どもの希望が今日では重視されるようになってきている。年令別にははっきりしたことが言えないが，職業別にはA群の方が親の判断が多く，B群の方が子どもの希望が多い。

(5) 選択の方針としては，美しく楽しいもの(43%)，子どもの喜ぶもの(29%)，教育的なもの(27%)の順になっていて，牛島調査とはまったく逆の順である。むかしの親は絵本の教訓性を重視したが，今日はそれよりも審美性を強調する態度に変わってきていると言えよう。ただしA群は，子どもの興味と教育性をB群よりも重視し，審美性はB群の方が重視している。

3. 絵本の与え方

牛島調査では，子どもが要求するのを待って与えるというものが多く，それが年令とともに増す傾向が見られたが，今回の調査ではそれが，比較的少く(21%)，年令とともに減じている。そして，定期的に与えるというものが54%，親が積極的に与えるというものが21%で，今日の子どもには絵本は要求しなくても与えられるものになっている。この傾向はA群の方にいちじるしい。

4. 子どもの絵本への接近

(1) 絵本の好き嫌いを5段階に評定してもらったところ，「たいへん好き」は45%，「やや好き」は30%，「普通」は24%，「あまり好かない」が2%，「ぜんぜん好かない」が1%となり，絵本に対する興味は一般に高く開発されているようである。ところが年令別に見ると，「たいへん好き」が3才と5才とでは50%なのに，4才は37%と低い。4才で一時絵本への興味が低調になるという事実（少なくとも親の目にそう見えるという事実）は問題である。なお牛島調査では整理の仕方が違うので，この問題は出ていない。

(2) 絵本は誰と見ることが多いか。母と見るのが42%，一人でが33%，父とが9%，兄姉とが9%，祖父母とが5%で，買った最初は母と見ると記入したものも少なくなかった。牛島調査でも母親が最高であったが，兄姉や祖父母も多かった。それが減じたのは家族構成の変化を反映しているのであろう。これに反して父親がむかしよりも多くなっているのはおもしろい。

5. 子どもの好きな絵本

(1) 最近子どもにいちばん好かれた絵本を20位まであげると次のようである。

幼稚園　小学館
たろうのともだち　村山桂子文・堀内誠一画　福音館
ちびくろさんぼ　バンナーマン文・ドビアス画　岩波書店
こどもがはじめて出会う本　ブルーナ文・画　福音館
たのしい幼稚園　講談社
あいうえおブック　世界文化社
図鑑　小学館
ＡＢＣブック　世界出版
子どもと自然　ひかりのくに
ひとまねこざる　レイ文・画　岩波書店
いたずらきかんしゃちゅうちゅう　バートン文・画　福音館
ぐりとぐら　中川李枝子文・大村百合子画　福音館

いやいやえん　同上

チャイルドブック　チャイルド社

だるまちゃんとてんぐちゃん　加古里子文・画　福音館

エルマーの冒険　ガネット文　福音館

トップとタップ　岩崎書店

イソップ　小学館

ちいさいおうち　バートン文・画　岩波書店

(2) 好かれた絵本の内容を選択肢で答えてもらった結果は表1のようであった。

表 1 好かれた絵本の内容 (%)

内 容	全体	男—女	3—4—5才
動 物	27	26—29	24—25—30
生 活	26	22—30	29—27—23
乗 物	10	16— 4	15—14— 6
戦 争	1	1— 1	1— 1— 1
科 学	5	8— 2	6— 5— 5
空 想	16	18—12	16—12—19
その他	15	8—24	10—16—17

全体として動物と子どもの生活を内容とする絵本が多く好かれている。男女別に見ると，男児のほうが好む傾向の強いものは乗物・科学・空想であり，女児のほうは子どもの生活・動物・その他を好む傾向が見られる。年令別に見ると，子どもの生活と乗物とは年令が上になるにつれて減少していくが，動物と空想とは増加していく傾向が見られる。なお空想が4才で陥没しているのは，前述の絵本の興味がこの年令で低調になることと関係があるかもしれない。

牛島調査では，乗物とならんで戦争・軍事が高位を占めているが，後者は今日ではほとんど姿を消している。

(3) 好かれた絵本は何をねらいとして作られたものと思われるかという問に対する回答は，子どもの生活指導(48%)，楽しいレクリエーション(29%)，科学的知識(12%)，芸術的鑑賞(8%)の順になっている。これは年令差がほとんどないが，男児は科学的知識を，女児は生活指導のほうをやや多く好んでいる。

(4) 好かれた絵本の絵の描き方を，「現物に近く輪廓がはっきりしている」と「形よりも気分を出そうとしている」とに分けてみると，全体としては有意差がない。しかし年令別にすると，前者は55→49→43%と減少するのに対して，後者は45→49→52%と増加していて，年長者のほうが気分的な絵を好む傾向があると言える。男女差はない。

(5) 好かれた絵本の文の形式は，「絵が主になっている」もの17%，「短い説明がついている」もの26%，「物語が書いてある」もの55%で，物語絵本が全体的に愛好されている。ただし3～4才では前2者への愛好も見られる。この傾向は牛島調査でも同じであった。

第2部　子どもの好きな絵

1　実験の手続

子どもに2面の絵を見せて，どちらのほうが好きかを問い，指差させる。2面の絵は，同じ物語の同一場面で，画家が違い，表現方式が違う絵本から選んで対照させた。まず物語のあらすじを語り聞かせて，その場面になると1対の絵を見せて，好きな絵のほうを指摘させた。牛島実験では，2面の絵のどちらを長く見ているか，視線の方向によって判断しているが，予備実験の結果それではあいまいになるので，指差させることにした。ただし。その指摘が真に好きなほうを意味するかどうかは疑わしい。さらに，幼児が，2面の絵を見くらべて「より好き」という判断ができるかどうかも疑われるのであるがそれが，可能だという仮説に立つことにした。

2. 絵の組合せ

絵の表現方式を次のような対照に分析し，それぞれに該当する絵本の絵を選んで実験材料にした。

(1) 「余白あり」と「余白なし」

余白の多い絵と全面にべったり絵がかきこんである絵。

「ブレーメンの音楽隊」犬とロバが泣いている場面。福音館：ひかりのくに

「ねむりひめ」王子が城にきりこむ場面。福音館：講談社

(2) 色彩の多少「多彩」と「淡彩」

「一寸法師」お碗の舟の場面。至光社：福音館

「ねむりひめ」魔法使の場面。主婦の友社：福音館

(3) 色彩の鮮明度「はっきり」と「ぼかし」

「一寸法師」都の人々と一寸法師の場面。講談社：福音館

「ももたろう」鬼退治の場面。ひかりのくに：福音館

(4) 背景の有無「中心」と「背景」

中心になる物だけを描き背景を省略したものと，背景が描いてあるものと。

「ピカくん目をまわす」信号機の修理の場面。福音館：こどものとも」

「ももたろう」誕生の場面。福音館：講談社。

(5) 構図の「強調」と「全体」

場面の一部をクローズアップして描いたものと，全景が描いてあるものと。

「ピカくん目をまわす」青です進めの場面。福音館：こどものとも

「一寸法師」お邸訪問の場面。至光社：ひかりのくに

(6) 「立体」と「平面」

立体的な絵と，貼り紙などの平面的な絵と。

「三びきのやぎのがらがらどん」大きいヤギとトロルの対立の場面。福音館：こどものとも

「ちびくろさんぼ」フレーベル館：ひかりのくに

(7) 「写実」と「図案」

「おだんごぱん」狐の鼻とパンの場面。福音館：こどものとも

「七ひきのこやぎ」狼が井戸に落ちる場面。福音館：講談社

(8) 「輪郭あり」と「輪郭なし」

日本画ふうに物の輪郭線が描いてあるものと，そうでないものと。

「ブレーメンの音楽隊」鳥との出合の場面。集文社：ひかりのくに

「ももたろう」洗濯の場面。ひかりのくに：小学館

(9) 「擬人化」と「自然」

「ピカくん目をまわす」夜明けの場面。福音館：こどものとも

「七ひきのこやぎ」母親お出かけの場面。講談社：福音館」

(10) 「表情豊か」と「表情乏し」

「おだんごぱん」狼との出合の場面。福音館：こどものとも

「ちびくろさんぼ」偕成社：岩波書店

(11) 「人形絵本」と「普通絵本」

ぬいぐるみの人形に演技をさせ写真にとったものと，普通の描画によるものと。

「ねむりひめ」老婆の糸つむぎの場面。フレーベル館：福音館

「七ひきのこやぎ」狼登場の場面。フレーベル館：福音館

3. 被験者

東京の幼稚園と保育園の幼児各30名。計60名。それぞれ3才，4才，5才の男女各5名ずつ。個別に実験した。

4. 結　果(1)

(1) 余白の有無

「余白あり」を選んだもの14名，「なし」を選んだもの46名で，余白のないほうが好まれている。この傾向は女児のほうにいちじるしい。

(2) 色彩の多少

「多彩」が43名，「淡彩」が23名，不明が1名で，色数の多い絵のほうが好まれている。

(3) 色彩の鮮明度

「はっきり」が43名，「ぼかし」が16名で，色彩の鮮明な絵が好まれた。

(4) 背景の有無

「中心」が19名，「背景」が41名で，背景の描きこんである絵のほうが好まれた。

(5) 構　図

「強調」と「全体」ともに30名。ただし年令的には「強調」から「全体」に推移する傾向が見られた。

(6) 立体性

「立体」が34名，「平面」が26名で，立体的な絵のほうが好まれる。ただし年令的には「平面」から「立体」に推移する傾向が見られた。

(7) 写実性

「写実」が21名，「図案」が39名で，図案化された絵のほうがやや好まれた。年令差はない。

(8) 輪 郭

「輪郭あり」が19名，「輪郭なし」が41名で，後者のほうが好まれた。

(9) 擬人化

「擬人化」が37名，「自然」が23名で，擬人化した絵のほうがより多く好まれた。

(10) 表 情

「表情豊か」が31名，「乏し」が28名。アップリケのような表情の乏しい絵は低年令にやや多く，年令が進むにつれて表情の豊かな絵に移行する傾向が見られた。

(11) 人形絵本

「人形絵本」は52%，「普通絵本」は7%で，圧倒的に前者が多く，女児がややこれに傾いているが，年令差はない。

5. 結 果(2)

以上の11対，22項の要因のうちより好きだとして指摘された度数の多いものから配列すると次のようになる。

a	人形絵本	52	f	図案化	39
b	余白なし	46	g	擬人化	37
c	色彩鮮明	43	h	多彩	36
d	輪郭なし	41	i	立体的	34
e	背景あり	41	j	表情豊か	31

このように，(5)構図の強調的・全体的，(10)表情の豊かさ・乏しさ，(6)描法の立体的・平面的などは，幼児の好みとあまり関係がないようであった。

牛島実験と比べて顕著な一致を示しているのは，(3)色彩鮮明と，(4)背景ありとであった。逆の結果になったのは(8)輪郭の要因で，牛島実験では「輪郭あり」のほうが好まれていた。これはむかしは日本画ふうの図がらが多かったので幼児はこれになじんでいたからであろう。

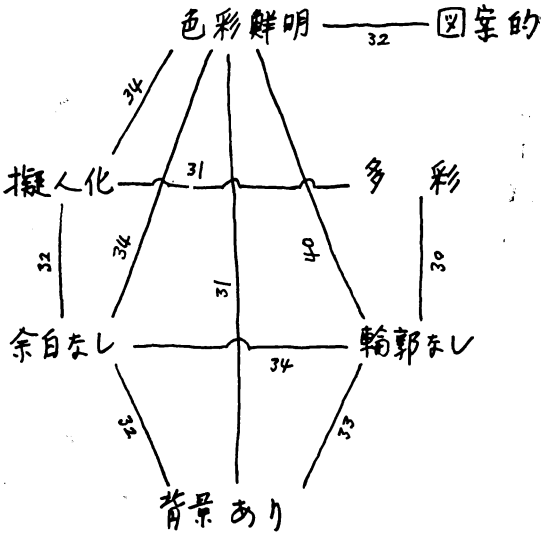
6. 結 果(3)

なお同一人の好みに相関している要因で30名以上に現われているものは次のようである。

a	人形絵本——擬人化	46
b	人形絵本——輪郭なし	46
c	人形絵本——余白なし	43
d	人形絵本——背景あり	41
e	輪郭なし——色彩鮮明	40
f	人形絵本——図案的	40
g	人形絵本——色彩鮮明	38
h	人形絵本——立体的	36
i	人形絵本——構図全体的	35
j	擬人化——色彩鮮明	34
k	余白なし——色彩鮮明	34
l	余白なし——輪郭なし	34
m	人形絵本——表情乏しい	33
n	輪郭なし——背景あり	33
o	図案的——色彩鮮明	32
p	擬人化——余白なし	32
q	背景あり——余白なし	32
r	背景あり——色彩鮮明	31
s	擬人化——多彩	31
t	輪郭なし——多彩	30

以上のように人形絵本は他の9項の要因と関連して好まれているのである。言いかえると人形絵本は子どもの

図1 幼児の好む絵の構造



好む絵の条件を9項もそなえているが故に，好まれているのである。

そこで人形絵本を除くと，子どもの好む絵の構造は図1のようになる。

おわりに

スミスは，絵本の絵として大切なことは，その形式上の条件よりも，絵の中に物語が動いていることだと述べている。瀬田貞二らも同様のことを強調している。これは無論のことなので，私どもの実験では，物語を話して聞かせる途中で画風の対照的に違う1対の絵を示して，どちらが好きかをたずねることにした。このために，同一の物語を扱ったいくつかの絵本を集め，その中から画風の対照的な数対の画面を選び出さなければならなかった。事実それはまことに困難な作業で，各の対の対照性がはっきりときわだったものでなくてもやむをえず用いた材料もある。したがって対の中の一方に他の条件が強くはたらいて子どもの判断を動かしているかもしれない。

また既述のように，「より好き」という幼児の判断が実際には何を意味しているかも疑わしい。

このようなハンディキャップを一応無視して，幼児の好む絵の形式上の条件を分析したのである。今後の絵本研究の捨石になれば幸である。

なお第1部の調査で，子どもに与えて喜ばれたと親が報告している上位にある絵本の絵や，その画家の絵の傾向を点検すると，実験結果と反して，気分的で，白い余白を生かした，新しい画風の絵が多いのである。このことも，絵の表現方式の問題よりも，物語の興味の重要さを示しているのではあるまいか。最近の絵本の絵は古い殻を脱しようと試みつつある。したがって，絵の形式よりもその機能の分析が必要だとも思われる。

参考文献

(1) 牛島義友・矢部信一「絵本の研究」協同公社出版部 1943
(2) L.H.スミス，石井桃子他訳「児童文学論」(1953版)岩波書店 1967
(3) 島越信・森久保仙太郎「3才から6才までの絵本と童話」誠文堂新光社 1967
(4) 瀬田貞二・中川正文・松居直・渡辺茂男「絵本と子ども」福音館 1966
(5) 三木安正「絵本の研究」フレーベル館 1961
(6) 矢崎源太郎・神宮輝夫「子供に読ませたい本」社会思想社 1967
(7) 無着成恭「子どもの本220選」福音館 1664
(8) 山下俊郎「家庭教育」光生館 1967
(9) コルネイ・チェコフスキー，南信四郎訳「2才から5才まで」三一書房 1964

SUMMARY

Information on picture books was gathered from a questionaire given to a sampling of 464 mothers of kindergarten children in this country.

This information showed that 2 or 3 copies a month were bought, the prices of which ranged from ¥100 to ¥199 in general. Mothers prefered beautiful and pleasant ones to instructive ones.

The contents of picture books that were most liked by children were animals and daily life scenes, and then imagination, vehicles, and science, in that order. There was little enthusiasm for war.

In addition, we tested 60 pupils from 3 to 5 years of age about the things in the picture books which were of interested to them. We prepared 11 pairs of pictures which illustrated the same scenes of the same story, but which were drawn in a differrent way. Showing these pictures, we asked them individually whichthey liked better.

It was found that the following illustrations were more interesting:

(1) Puppets used as characters
(2) Those drawn with no blank space
(3) Clear colors

(4) Those with on heavy outlines
(5) Those with back-ground scenes
(6) Cartoon-like pictures
(7) Those showing personification of animals and other animate and inanimate objects
(8) Those with multi-colored scenes
(9) Those with perspective
(10) Those wihh facial expressiveness

ＩＲＡ（国際読書学会）入会のおすすめ

International Reading Association は 1955 年に設立された国際的な読書科学研究の機関で，日本読書学会もこれに加盟しています。日本読書学会の会員でＩＲＡにも入会を希望される方は，下記の要領で入会のあっせんをいたします。

記

1. あっせんを受けるのは日本読書学会の会員に限ります。
2. ＩＲＡの会員には次の３種の雑誌が配付されます。希望の雑誌名を申し出て下さい。
   (a) The Reading Teacher（小学校の読書教育を中心としたもの）
   (b) The Journal of Reading（中学校以上成人までの読書教育を中心としたもの）
   (c) Reading Research Quarterly（読書科学研究の専門誌）
3. 会費は年額次の通りです（1968～69年度）

雑誌１種類の配付を希望する者	7 ドル
雑誌２種類の配付を希望する者	13 ドル
雑誌３種類の配付を希望する者	19 ドル

4. あっせんは毎年１回のみ行います。年度途中のあっせんはいたしません。
5. 新入会希望者は１ドル 400 円の割合で計算した会費を７月10日必着にてお送り下さい。海外送金手続後精算致します。
   送り先　東京都文京区音羽 2—12—21　野間教育研究所内　阪　本　敬　彦
6. 雑誌はＩＲＡから直接送られますので，住所氏名には必ずふりがなをつけて下さい。
7. 継続の方は，ＩＲＡから Renewal Notice が届いてから２週間以内に御送金下さい。その際 Renewal Notice を必ず同封して下さい。
8. ＩＲＡから会員証を受けとられましたら，会員番号を阪本宛に御通知下さい。
9. この件についてのお問合わせは，野間教育研究所　阪本敬彦　942—1111
   内線　野間研にお願いします。

小泉信三の読書論について（II）*

東京女子体育大学

飛　田　文　雄**

4　いかに――精読

1.　再　読

小泉の読書論の基本，良書を精読するという線に沿い，まずその良書の問題を，領域的にたずねてみた。次は，その精読の問題である。

すでに見てきたごとく，小泉の読書論は人間形成をねらいとする。したがって，名著あるいは大著を資料とすることを勧める。しぜん，それに対する理解という問題が起きてくる。

理解ということにおいて，小泉は部分的難解ということと，全体的把握ということとをポイントとし，これに対して言う。恐れず読み進め，くりかえして読めと。部分的に難解の所があっても，それに屈することなく，読み続けて行けば，いつかわかるときが来る。また，書物というものは，全体を読み終えてはじめて，著者の真意がわかるものである。部分的な障害に意気を失することなく，とにかく読み進むことが肝要であるとする。それから，同じ書を再読三読することを忘れるなと強調する。特に大著名著となると一読しただけでは部分にとらわれてしまって，全体的な把握がなかなかできない。二度あるいは三度読んで，ようやく著者の言わんとする真意がつかめ，そこからふりかえって部分の意義を，全体的な構成の中に位置づけて理解することができるというのである。さらに，くりかえし読みは，時を隔ててすれば，自己の成長を知る尺度にもなるとする。初回にはのみこみえなかったところが，何年かおいた二度めの通読においては，十分に意味をくみとることができる。あるいはまた，初めには感動した事が，じつはらちもないことだったと悟ることもあり，逆に若い日の自分の眼識が意外に確かであったことに満足することもあるというふうに，くりかえし読みは，人をして読書の初心に帰らせつつ，思いのほかのたのしみを与えるものであるとする。

2.　再　現

読んだ事は，その時理解すれば，あとは忘れてしまってよい，ことがらは忘れていても，何かの折りに，何かの形できっと役に立つとよく言われる。しかし，小泉は精読ということを，もっと功利的に解釈する。読んだ以上内容を要点的に記憶すべきだとするのである。

記憶するには，十分に理解しなければならない。理解を十分にするには，書物から読み取ったものを再現してみることである。自分のことばで言ってみる。あるいは書いてみることである。読書会という形式で話し合ってみるのもいいし，単に人に話して聞かせるという形でもよい。そうした相手のないときは文章に書いてみるのである。ことに後者のばあいは，要旨のつかみかたの不十分さということについて，しばしば強く反省させられるという利点がある。それにまた，読んだ結果を人に語るあるいは文章に書くということを前提にして読書するとすれば，うっかり読んでいられない，しっかり読まねばと，読み方そのものに，逆に好作用を及ぼすということにもなる。そしてその例として小泉は，森鷗外のばあいをあげる。鷗外は，読んだ書物について，よく梗概を作った。それは「鷗外制作中の重要なる一品類を成す」ほどで，「鷗外が如何にその書を読み得たかの表現で……

---

*　On the comments on reading by S. Koizumi.

**　HIDA, Fumio (Tokyo Women's Physical Education College)

強い個性の所産である。」したがって，普通の人が鵜外のまねを型どおりするわけにはゆかないが，自分のことばでまとめてみるという点で大いに学ばねばならないとする。

読んだ書の内容を，口か文字で語ってみるという方法は，弁も筆も立ち，また学者・教育家という職掌がら，そうした機会をしばしば持つことのできた，かれ小泉の実感に出るものであろう。それだけに，もう一歩踏み込んで，なぜそうした方法が読書内容の記憶に有効であるかということに，考察のメスを入れてほしかったとおもう。

3. 記　入

読書内容を心に留める次の方法として，小泉は傍線法と書き入れ法を勧める。わが意を得たりという所に線を引いたり，自分の感想を書き入れたりすることであるが，これは内容を記憶するためばかりでなく，前者はこれにより読書の感興を深め，後者はそれによりいかにもその書をわがものにしたという感じにひたれると，かれは言う。そして，書き入れの例として，福沢諭吉・夏目漱石のばあいをあげる。諭吉は，書物の欄外に主として本文の要旨を摘記し，それに適宜自分の意見や感想を混じえる。漱石は，書き入れがまことに豊かで，それが全集に採録されてるくらいであるが，それを見ると分析し批判しつつ読んだことがうかがえる。また，傍線法については，エリザベス＝ヴァイニング夫人が，人は，心して求めることにより，「恍惚」のしあわせをわがものとし，さらにそれを豊かにすることができると説いたことを読書に結びつけ，「吾々は読書玩味して会心の箇処にアンダラインを引くことによって読書の楽しみを加え，そうしてアンダラインを引くような心構えをもって読むことによって，更によくアンダラインすべき章句を見出すことが出来る。」とする。この引用の後半「アンダラインを引くような心構えをもって云々」は，読み取った事を人に語ることを前提として読むことが読みの心理に好影響を及ぼすといったそれと同じ関係のことである。

4. 観　察

精読について，あるいは全文的な読みの技術を，あるいは局部的なそれを説く一方，小泉は精読の心構えといった面についても筆を進めることを忘れない。それを紹介してみる。

小泉は言う。「読書は独り書中記載の事実を学ばせるばかりでなく，当然観察思考の力そのものも，また読書によって養われなければならぬ筈である。」読書家はとかく書物を信頼しすぎる結果，自分で実際を見，あるいは考えることをおこたりがちである。自分で見，考えるかわりに，書物の著者に見てもらい考えてもらおうとする。いっそうわるいのは，自分で見，考えたところを，自分で信用せず，著者のそれを尊重するようになることである。これでは，観察思考の力をやしなうどころではない。

では，読書ぎらいが言うように，書物から知識を得るのは，わるいことか。そうではない。まず，書物によって知ったら，つぎに，それをみずからの目で確かめるのである。逆に，実際を自分の目でまず見たら，こんどは書物で，それを学ぶのである。読書と観察と両々あいまって「片羽」でない知識を得ることができる。人は読書に際して，こうした習性を身につけるよう注意しなければならない。

しかし，実際はなかなかそうはゆかない。ことに，日本の社会科学者のばあい書物にたよることが強く，観察を軽視しがちなのは残念である。観察を軽視すればその研究は書物から書物への循環に終始するようになり，直接人間生活の現実に触れた所論は立てられないことになる。そして観察にすぐれた例として，小泉は，福沢諭吉のばあいをあげる。かれの名著で明治政府の維新改革の指針となった「西洋事情」は，かれが旧幕府の遣欧使節に随行して滞在した，わずか一年間の手記を元として書かれたものであること，また「旧藩情」に発表された中津藩を例とした旧藩制下の階級制度の詳細はすべて福沢の直接の観察によっていること等，いずれもかれの観察眼の鋭く詳しかったことをものがたっているとする，また，福沢は明治の文明開化に資した名著をいくつかもの

しているが，そのためにかれが読んだ洋書はさして大著と称するほどのものはなく，だいたい通俗の教科書ふうの書にすぎなかった。にもかかわらず，かれがあれほどの名著を世に送ることができたのは，そうした通俗書を通して，その書の文章には表わされていない奥にあるあるものを読み取ったかれの読み方——広義の観察力によるとするのである。

5. 思　索

思考についても，小泉は同じように言う。人は読書によって思考活動をうながされるが，ともすると思考を発動することを怠って，かわりに著者に思考させ，自分はその経過と結果を享受するにとどまりやすい。本来，読書そのことは受動的なものであるが，だからといって著者の言うところを享受するにとどまったのでは，そこになんらの発展も望めない。享受すると同時に，その反応として能動的な思考活動が始動しなければならない。それがあって初めて読書はその読者のものとなるのである。思考の伴なわない読書は，要するにもの知りを作るにすぎない。世に学究と称される人の多くは，こうした能動態勢を忘れている。ショウペンハウエルは，読書は人の頭脳を借りて思考する行為であるところから，その安易性がともするとその行為の度をすごさせ，むしろ読み手のためにならないとした。これは少し言い過ぎであるが，それにしてもひたすら著者の言う事に盲従して自主性を持たない現代知識人に対する頂門の一針たるを失わない。こうした現代知識人の典型がいわゆる学者と呼ばれる人々であるが，ハウエルは，その学者と思想家とをはっきり区別する思想家は「自ら考える人」であるが，学者は単に「読む人」にすぎないと。

ここで小泉は，ゲーテの「ファウスト」に出てくる学僕ワグナアのことを持ち出す。善良従順な篤学者で師をひたすら尊敬するワグナアは，いわば学者のサンプルみたいなものである。師ファウストが地霊を呼んでまで悩むその悩みのわからない人間であるかれの悦楽は読書にあり「本を読めば，冬の恵ある，美しい夜になって，神聖なる性命が手足を温め」てくれる。しかし，こうしたありかたは，読書人として学者として，ある程度やむをえないことではあるが，それがしぜんだとおもってはいけない。読むことに没頭してみずから考えることをしないところから生ずる狭量・鈍感・拘泥について，読書人はつねにファウストの立ち場になって，反省してみることを忘れてはならない。

小泉は，かく読書と思索における否定的具体例をあげてその不可を説く一方，その理想像を掲げることを怠っていない。理想像は漱石である。漱石は，いろいろの面で鷗外と対照されるが，読書と思索という問題においても，まさに対照的である。鷗外は，他人の書を読むと，その説を借りることをしばしばした。芸術批判をハルトマンの美学によって行ない，食物論をフォイトの学説に従って行なったりしたのは，その好例である。もちろん，全面的にそれらの説を奉じたのではなく，当座の便宜に出たのである。これに対し，漱石は「遙かに一徹，非妥協的で，如何なる権威者でも，その取り次ぎ人となることを肯んぜず，自分の言うことは自分の信ずるところであり，自分の言うことに対する全責任は自分にあるという態度」であった。一口にいえば主我的ということである。これにはしかし，著者の言わんとするところを，十分に消化しないで，批評に急ぐという弊害が出てくる。漱石は，もちろんそれを承知していた。しかもなお，当時の日本の状態としては，あえて主我的に出ることが必要であるとした。主我的に出るといっても手放しでそうするのではない。科学的分析による客観性を踏まえて立つのである。漱石のばあい，その研究は文学に関する問題であるから，科学的分析の資料はもっぱら読書によって採集される。採集した資料に対し，科定的な分析を加え，その結果に判断を下して，さてその上に立って自己の主張を打ち建てるのである。だから，強烈な自己主張をするが，けっして主張のための主張ではない。何人もなっとくのゆく論拠を踏まえたそれである。これを行為の流れから見ると，読書によって資料を採集したあと，あるいは平行して，かれの思考活動が，初めは科学的についで主我的に展開されるということである。す

なわち，「かれはその読書において決して納受の一面に甘んじて止まることなく必ずこれに反応して，能動的なる思索に進入して行った。漱石の思索は時に『理論的，あまり理論的』の嫌いを免れなかったが，虚心なる読書の受動と主我的なる思考の能動とをよく一に合せたる点において，その態度は後進の最も模範として学ぶべきものであった。」のである。

6. 語　学

精読，いや読書以前の問題として，語学力ということがある。

小泉は，専門の研究があるばあいは別として，だれでも「せめて一つだけは是非外国語をものにして置きたい」と主張する。その外国語は常識的に言って，第一に英語，それから独仏がこれに次ぐと言う。

語学力をやしなう方法として，かれは自分の経験にもとずく二つの方法をまず提唱する。「一つは一字一句丹念に辞書を引き文法書を開き或いは先輩に尋ねつつ進むこと。今一つは辞書や文法書などはそっち除けにドシドシ読んで，全体もしくは大体の意味を摑むこと」である。そして，どちらかというとかれは後者に比重を置こうとする。「真に書籍を解せんがためには辞書と文法の知識以上に更に或る物を得なければならず，それは読むことそれ自身によってのみ得られる」からである。杉田玄白らの「蘭学事始」のしだいは，そのよい例である。ターフル＝アナトミアを前にして「茫洋として寄すべきなく，只あきれにあきれて居た」のが四年の歳月ののちには「解体新書」の業となって現われたのは，一にとにかく読もうという熱意のたまものである。すべて「この通り外国語の本もくり返し読めばやがて意外によく解るものである。」と言いつつ，小泉はここでクギをさしておくことを忘れない。わかるといっても論理的にわかるというのであって，文章の陰影とか味わいとかいうことになると，さらに深く勉強しなければならないというのである。要するに，語学力習得に対するかれの意見は，外国語を恐れてはならぬ。しかし，あなどってはならぬというかれ自身言う平凡な注意に帰する。

しかし，これはかれの原則論である。原書を数多く読まなければならなかった小泉には外国語習得に関する体験的具体策がいくつかある。一つは，筆写ということである。自分の好きな外国文の一章なり一節なりを，くりかえしくりかえし筆写しているとそのうちに文の構造や意味のニュアンスが，しぜんにのみこまれてくるというのである。もう一つは朗読である。外国文を声に出して特に抑揚に注意してくりかえし読めば，たいへんためになるというのである。

体験的具体策のもっとも大なるものとして，小泉は飜訳ということをあげる。読書論において飜訳といえば，飜訳調とか飜訳文と原文との関係とかいったように，すでに飜訳された文章を読み手のがわから取り上げる形が普通であるのに，小泉のばあいは，これを語学力の養成という点から利用しようというのである。

しかし，かれが展開するのはいわゆる飜訳論で，なぜ飜訳が語学力養成に役立つかということの説明から手を抜いているのが，少しおかしい。かれは言う。名著を飜訳することは画家が名画を模写するようなもので，それにより「原著者の物の見方考え方且つその思想の表現のし方をわが物として学び取ることが出来る。」それから一通り読んだところでは別にどうともない章句が，飜訳するとなると，なかなか適確な記し方ができないことが多い。これは，訳者の日本語の語いが貧しいことにもよるが，それより原文の意味を確かにつかみえていないせいである。そういうとき，訳者は，もう一度原文に立ち帰って，その意味を明確にしなければならない。つまり「人は屢々飜訳することによって始めて原文を解する。」ことになるのであると。これは，飜訳論である。これが語学力の習得に関係するのは，そうして原文と訳文との間を行きつもどりつして苦心しているうちに，その語学の力がしぜんについてくるという点においてであろう。

かれの飜訳論は，さらに「飜訳の理想」という問題に進む。かれは，学問上の飜訳の基準を，「訳が正確であって，而して読み易い」というところに，いちおう置

く。ところが，正確ということと読みやすいということがなかなか一致しない。あまりに正確を期しすぎて直訳がむきだしになると，反対に訳文が読みにくくなり，かえって意味がわからなくなる。そこである程度の放胆ということが必要になる。原文の一字一句にとらわれることをやめ，思い切って飜訳をやるというのである。そうすれば，訳文も読みやすくなり意味も取りよくなる。しかし，そこには，限度がある。いかに読みやすくなっても，原文の意味から遠く離れてしまっては，飜訳と呼ぶわけにはゆかない。放胆になっても放恣であってはならないのである。「放胆が放恣とならないためには，反復倦まざる原文の熟読と，そうして訳文の推敲とがなければならない。」つまり，飜訳における放胆と放恣の問題は原文の熟読と訳文の推敲との関係に移り，その操作を熱心に行なうところに，語学力のしぜんなる養成があると，小泉は言おうとしているようである。

要するに，飜訳を飜訳文の読み方というほうに持って行かず，語学力の習得に関係づけたのは，小泉の一見識である。ただ，その説明にあたり，いわゆる飜訳論議に流れすぎ，それと語学力習得との関係そのものを分析解明することを忘れてしまったのは，残念である。

5 反 省

小泉信三の読書論のあらましを見てきた。

書を読むのは人であり，書を書くのも人である。そして，読んで読み得んとするのも人であり書いて書き伝えんとするのも人である。されば，読書は人を措いては意義のない行為である。その意味で，小泉が終始「人」を踏まえてかれの所論を展開してきたのは，それなりに正しいことであった。特に，書の内容にのみとらわれて，読む自己，書く相手のことをおろそかにしがちな現代読書人に，貴重な示唆を与えるものである。

しかし，人といっても，それを相互にコンムニケートする極限の場は，すなわち文章である。文章に形象したものを文章から形象する，それが読書の形式である。つまり，読書行為において，そこに具体化の形において存在するものは文章である。にもかかわらず，世には読書を言いながら，文章ということに触れようとしない人がいる。当然すぎて，改めて持ち出すまでもないというのであろうか。

小泉は，そこに気がついていた。人の書について言うとき読書を論ずるとき，つねに文章ということを問題とした。ただ，その文章論が作るがわのそれにかたより，文章のありかたが理解ないし鑑賞ということと，どのようなかかわりあいを持つかということに，科学的な解明をなしえなかったのは，かれのために惜しむところであるが，しかしとにかく，読書に際し文章に注目すべきことを指示した見識は，大いに多としなければならない。

最後に反省しておきたいのは，小泉の論議推進の姿勢についてである。小泉は，知ってのとおり，読書家であるとともに文筆家である。それもいちおう文章を書くというだけでなく，文体とか文調とかいった面にまで鋭い感受性と批判力を備えていた人である。この製作面における体験と能力が，読書論をするばあい，強く作用して，ともすると読むがわより書くがわから論を進める姿勢を取ろうとする。この姿勢は，あるときはいかにもうがった，かゆいところに手の届くような説得のしかたになるが，他のばあい製作体験のとぼしい読み手には，はなはだ実感の伴わない説明に堕するおそれなしとしない。

これはしかし，見方を変えれば客観性を欠くということでもある。なぜそうするのか，なぜそうするのがよいのか，なぜそうしなければならないのか，そういった事態に関し，心理学的に分析しあるいは総合した解明を，かれは提供することを十分にははたしていない。一口にいえば，科学性にとぼしいということである。だからといって，かれの所論が説得力を欠くというのではない。豊富な体験からしみ出たかれの意見や忠告は，かれを知る者には重厚な信頼感をいだかせるに十分である。問題は，かれを知らない人のばあいである。かれの学者として教育家としてまた社会評論家としての業績や人物をつまびらかにしない人々に対したとき，はたしてどれだけの説得力を保ちえるかということである。近代読書論が

持つ共通の問題として，考えておかねばならないかと思う。

主要参考資料（本文の引用のうち，特に注のないものは，すべて岩波新書の「読書論」による。）

○わが愛読書（師・友・書籍）　全集12
○読書と文章（慶応義塾高等部会報）　全集12
○読書（大嘉新聞）　全集12
○購書難（「学鐙」）　全集13
○読書を勧む――学生のために――（学窓雑記）　全集13
○再読の興味（学窓雑記）　全集13
○運命（大学生活）　全集13
○読書論――学生のために――（師・友・書籍第二輯）　全集12
○読書雑記　全集14
○炉辺の書（私の身辺）　全集14
○読書論（「岩波新書」）　全集14
○少年文学（朝の思想）　全集15
○無題（読書春秋）　全集15
○わが枕頭の書（朝の思想）　全集15
○古冊の読み方　全集14
○書籍（10日10話）　全集19
○読書・文学（１つの岐路）　全集19
○読んだ本（１つの岐路）　全集19
○文章閑語（座談おぼえ書き）　全集20
○愛読（ペンと剣）　全集20
○わが文芸談　全集20

（学者であり読書人であった小泉には，このほか他人の書に対する評論・感想・紹介・推薦等，数多くの読書関係の資料があるが，ここにはその多くを割愛した。）

児童漫画「長靴の三銃士」*

日本女子大学

阪　本　一　郎**

1. 連続漫画の復興

牧野大誓著・井元水明画「長靴の三銃士」が講談社から発行されたのは昭和5年(1930)である。その奥付のあとの出版広告を見ると，漫画本としては宮尾しげをの「団子串助漫遊記」と「軽飛軽助」に田河水泡（タカミザハとルビが付いている）の「漫画の罐詰」* の3冊しかリストされていない。

続編の「無敵三銃士」は昭和9年に発行されているが，その広告には，上記のほか宮尾しげをの「漫画のお祭」*「○□(まる　かく)さん・丶(ちょん)助さん」，田河水泡（タガハスヰホウとルビ）の「のらくろ上等兵」「漫画常設館」* が加わっている。このうち * 印は連続漫画ではない。

これから推すと，「長靴の三銃士」は，「団子串助」などの時代漫遊記ものと，「のらくろ」の現代喜劇ものとの中間にあって，子どもストーリ漫画の発達に実験的な寄与をしたものと見られる。昭和初期は，成人漫画をふくめて，連続ものが衰退していた。そのスランプからよみがえるスプリング・ボードとなった作品とも見られるのである。

2. 三銃士の素姓

この物語の着想は，子どもをデューマの「三銃士」に見立てて冒険させるというにある。「三銃士」は，ダグラス・フェアバンクスの主演した映画が大正の終わりごろ封切られて，好評を博し，そのイミテーションが日本でも（高木三平主演）製作されるというほどの人気であった。そのダグラスが映画の扮装のままでこの作品に登場して，三人の主役にフェンシングの稽古をつけ，三銃士に仕立てる。

主役のリーダー格はでん山デン子という“少しおかめさんですが，モダンで，勇敢なお嬢さん”。次にへそ山トン吉という“みかけは強そうですが，本当はカゲベンケイ”の坊や。それにむかし桃太郎の従者だったサル君がつく。ここですでに変わっているのは，女子と男子との性格があべこべにしてあることで，これを当時のモダン・ガールの社会的進出を反映していると解してはうがち過ぎであろうか。

この三人に，助演者として同年配の少女が二人，少年が三人つくが，この五人はいつもグループで登場して，敵役を演ずる。みんな同じ学校の児童である。それで彼らの後見役には先生や校長先生が出てくる。この作品に先行する「正チャン」，「団子串助」，「ズク小僧」などには，かならず親が出てきて親子関係の徳を説く1カットがあるが，これには親が顔を出さない。また後につづく「のらくろ」は孤児だが，やはり，親のないことを悲しむカットがあり，「ダン吉」は南洋の島に親の彫像をかざって郷愁にふけるというふうで，アメリカの「スーパーマン」ですら，親の死をいたんで墓石を建て，正義の鬼となることを誓う場面を設定している。だが長靴の三銃士は家の子としての性格を脱皮してしまっている。彼らの現実の生活場面（これに対して，鬼ケ島や竜宮などの想像の行動場面がある。）は学校とその周辺である。

---

* On a story comic : Three Musketeers in Top Boots.

** SAKAMOTO, Ichirō. (Japan Women's Univ.)

子どもの連続漫画が，主人公の親子関係に触れないようになる，これがはしりだと思われる。童話や少年少女小説などの読み物では，すでにこのような親から離脱した子どもの生活を扱っていたようだ。（これはくわしく調べてみないと断言できないが，爺婆の登場するおとぎ話の時代から，父母への適応をテーマとする物語の時代を経て，そういう血統から自立した社会の子としての生活を描く児童文学へと推移する系列があるのではなかろうか。）この作品の場は，まだ完全な離脱とは言えない。というのは「序詞」において，“天子さまの御恩，先生の御恩，父母の御恩，お隣の人の御恩”などが“もしなかったならば，私たちは一日も生きてゆくことができません。”と一言説教していることに見られる。“足にはく靴の御恩，それをよく知ることは，そのほかの御恩をみんな知ることです。”という前提で，長靴の三銃士が一芝居を見せるのである。

この作品が書かれた時代から見て，縦の封建的体制から脱出してしまうことは不可能であったであろう。むしろそれを強調するためにこの作品が構案されたとも見える。それにしても，作者が体制外の世界の子どもを捕えようとしていることに異色が認められる。見方を変えれば，そういう体制のきびしいなかであったからこそ，漫画物語によって，自由への逃避を誘ったのかもしれない。それが当時の読者たちに，ひとときの楽しみになったのだとも解される。

3. 三銃士のあらすじ

まず物語のあらすじを紹介しよう。前編「長靴の三銃士」は，3人の主役が頭に長靴をかぶらされるが，これが3人を超人的に強化する呪力を持っていて，彼らに三銃士の誓を立てさせるまでの経緯と，それを頭から脱ぎ去りたい気持との葛藤を語る。

第1巻　「生命のルビー」（33コマ）

3人が穴のあいた古靴をどぶに捨てる。そのあと鬼ケ島へ行き，鬼の生命のルビーを盗むが捕われ，刑罰として頭に長靴をかぶらされる。これは底が切れるまで脱げない。

第2巻　「とれぬ長靴」（17コマ）

送り返された3人が，いろいろとやってみるが，長靴は頭から脱げない。

第3巻　「学校ゆき」（48コマ）

長靴をかぶったままの3人は教室から追い出される。5人組にいじめられ，雛祭にも入れてもらえない。しかしよく勉強したので終業式には優等生のほうびをもらう。みんなから賞讃される。

第4巻　「三銃士となる」（31コマ）

巨大な筍の中の秘境で，かぐや姫から長靴を取るには京の町にいる紫覆面と会えと教わる。夜中にフェアバンクスが現われ，3人にフェンシングを教える。修業3カ月で，5人組に勝ち，仲よくなる。

第5巻　「三銃士の誓」（57コマ）

三銃士となる誓を立て，京の町に出て紫覆面（浦島太郎の132代の孫）と会うが，新選組に妨げられる。亀におそわって靴婆の家へ行く。古靴を捨てたことを詫びると，長靴は，それを見て笑った者の頭にとび移る呪をしてくれる。帰途河童との争になる。河童が笑うと長靴は河童の頭上にとび移り，河童がいやに強くなってしまう。3人が笑って取り戻す。そこで笑い競争になる。けっきょく長靴を頂いて逃げ帰る。

第6巻　「運動会の巻」（38コマ）

3人の在籍する赤小学校と隣の白小学校との対校競技に，赤小学校の敗色がこい。三銃士がやっと到着し，リレーに出場するが，笑った者に長靴が転々とびうつり，それを失うと負けそうになる。けっきょく笑って勝つ。3人は長靴のお宮を建てて奉納する。

後編の「無敵三銃士」は，ふたたび長靴の刑を受けた3人が，その呪からのがれる修業のため欧米を巡歴し，ついに自由になるまでの冒険活劇物語である。

第1巻　「野球の三銃士」（41コマ）

赤・白小学校の対校野球戦に敗けそうなので，長靴をとり出した3人が救援に出るなど長靴の呪力でしばしば徳行を重ねる。

第2巻　「長靴の賃貸」（29コマ）

3人は長靴の効能を自慢するようになり，長靴の賃貸を始めて大繁昌。それがもとで事件がおこり，鬼の王にまた長靴の刑に処せられる。

第3巻　「三銃士いづこへ」（36コマ）

こんどは笑っても取れない。取れる方法を求めて旅に出て，靴婆や紫覆面に会い，竜宮へ行こうとするが，廃墟になっている。

第4巻　「謎の大鍵」（41コマ）

亀の忠告に従い，“自分の力で，自分の知恵で”行先をさぐる方向探知器を研究して完成する。それに従って印度へ行く途中，廟行鎮の爆弾三勇士の墓に詣でる。エベレスト山頂で，大きな鍵を手に入れる。

第5巻　「紙芝居」（28コマ）

スフィンクスの下で満洲国の子が迷子になっているのを見付け，各国各地を紙芝居の巡業をして金をためて，送り帰す。ムッソリーニに歓迎されたあと，パリでにせ三銃士とぶつかる。ロンドン市長から大きな鍵はニューヨーク銀行の金庫の鍵だと教わる。

第6巻　「にせ三銃士」（29コマ）

同じ姿のにせ三銃士は，ニューヨーク銀行に先回りをして，金庫の中の箱を奪い去る。追撃戦になる。

第7巻　「動物の国」（38コマ）

不時着した動物の国は飢饉で悩んでいる。ライオン王に食料を分配させ，慈雨を降らせて，農民（動物）に感謝される。フクロ爺に，オホーツク海に落魄している竜宮へ行けと教わる。

第8巻　「乙姫婆様と大鯨」（30コマ）

乙姫は婆になって貧しい暮らし。それは大鯨が神鏡を奪ったためだという。大鯨を征伐にいき，これを捕え，日本の軍艦で竜宮に帰る。神鏡が戻ったので乙姫は若返り，城が再建される。

第9巻　「空中肉弾」（34コマ）

飛行船で満洲国へ渡り，日本軍の作戦に協力して，壮烈な空中戦を演ずる。敵の陣中ににせ三銃士がいたので，奪われた箱をとり戻す。鍵であけると，“捨てた古ゴム靴を可愛がれ”と書いた紙片が一枚。日本へ帰って，どぶに捨てた古靴を拾いなおし，大事にすると，長靴がとれる。もとの祠へ奉納する。

4. 物語のねらい

この物語の発端は，子どもが穴のあいたゴム靴をどぶに捨てることに始まり，結末はその古靴を拾って愛用することに終わっている。これを見ると作者は，物の愛用ということをテーマにしていると思われる。時はちょうど世界的恐慌のあおりを食って，浜口内閣が緊縮財政をとなえ，国民に節約を奨励していたころに当たる。（そして今では見られなくなった総ゴム靴が流行していたころである。）子どもに節約思想を吹きこむという意図が直接のモチーフになっているのは，そうした世相を反映しているのである。

しかし全編530コマの長編物語を通じて，節約のテーマは貫流していない。前に引用した「序詞」のことばのように，作者はこれを封建体制の中での報恩精神の具象として捕えようとしたらしいが，それも羊頭狗肉の観がある。物に対する報恩はすなわち節約であり，これる知ることは“天子さま”をはじめもろもろの恩を感ずることになるという趣旨は，物語が始まると間もなく蒸発してしまって，3人の頭に膠着してしまった長靴をどうして取り去るかの，呪力との抗争に興味を転じてしまい，テーマを追及するのを忘れて右往左往している。その脱線ぶりが，体制の圧力からの逃避効果を生じて，かえって読者を楽しませることになったようである。

この物語の中心興味の一つは，長靴を頭にいただく者に優越した力が付与されることであろう。それは「スーパーマン」のような誇大されたものではなく，人間の能力をやや上まわる程度の力に過ぎないが，それを得ることによって自分の意図はいかなる困難をも超克して達成されるのである。こういう「如意宝」の空想は世界のどの民族の説話にも古くからあるもので，人間に基本的な力の要求から派生したものと解される。小波の「ズク小僧」が親からもらった“知恵袋”や，印度の大僧正に呪力を付けてもらう“自在の珠”も，この如意宝の空想にほかならない。（「スーパーマン」では，彼の正装が如意宝のはたらきをする。）

ところで，この物語では，すばらしくあるべき如意宝が頭上の長靴とされている。その姿は周囲から笑いものになるのである。3人はなんとかして長靴を脱ぎとろうとする。すなわち自分の異常な属性を除去して，正常な姿にもどり，異端視からまぬがれようとする。これを人間に基本的な所属の要求の追求と解することができよう。このことがこの物語のもう一つの中心興味となって

いるのである。

以上の二つの中心興味が縄のようにないまぜられて物語が展開している。この二つの興味を総合すると，要するにここでは社会的承認（優越）の要求の達成が主流をなしていると見てよいだろう。社会的といっても，ここでは学校社会が主で，後編の５巻あたりからやや国際社会的になっている。したがって漫遊記ふうのいわば世界を跨にかけた冒険活劇になっている。

なお上記の２筋縒りの縄は，もう一つの２筋縒りの縄に縒り合わされている。このほうの要因は，笑いと教訓とである。頭に長靴をいただくことがすでに笑いの種だが，それを見て笑うと笑った者の頭に飛び移るという趣向。その他，落語だねの笑いもとりいれて，たんなる冒険活劇に走らない配慮をしている一方，随所で教訓を垂れる。「序詞」が修身の教科書みたいであることは前に書いた。三銃士が善行を重ねるが，“それを自慢するようになると，人はその時から，必ず悪いことをするようになるものである。” とか，“なんでも他人にばかり頼ることは，意気地なしのすることである。あてもなしに，ただブラリブラリうろつき廻る武者修行は古い昔の人のしたことである。我等が長靴の三銃士は，新日本の少年少女である。どこまでも自分の力で，自分の知恵で科学的に「長靴の取れる方法」をさがし出そうと，固く決心するのであった。” という調子である。

5. 物語のあべこべ論

この物語の笑いの趣向は，物ごとをあべこべにすることである。落語ではこの趣向を“さかさ落ち”とよび，予想が逆転することで笑わせている。論理的な思考の過程が突然に逆転する。ところがその逆転にも一理があることが理解されると，いままでの心理的緊張が急に解消されて笑いになるのである。それは異常を肯定させられる笑い，あるいは異常を肯定して（もしくは自覚しないで）いる者に対してその異常を指摘する笑いである。したがってこの類の笑いでは，正常と異常とが意識のなかで相剋している。その相剋のなかから新しい正常（別の一理）を発見した瞬間の緊張解消が笑いとなるのである。

この物語の構想は，この正常と異常との同居，すなわちあべこべの原理で一貫している。まず三銃士のリーダー格は女子であって，これが男性的な性格を持ち，相棒の男子は女性的な性格を与えられている。この男子の名が“へそ山トン吉”。助演のなかにも“北野ヘソ吉”がいて，異常にエッチである。デブの女の子の名は“ブデ子”とあべこべにしてある。

三銃士が足にはく靴を頭にかぶらされるのもあべこべで，これがために友だちから笑われる。この処刑をした鬼は，底が切れるまで脱げないと言うから，３人は逆立ちをして底をすりきらそうとする。ところがこの靴帽子は受刑者のしるしである。だのに，この靴帽子をかぶった者には超人力が与えられる。罰と賞とが同居している。

靴の家に住む靴婆は，靴帽子がぬげるまじないをしてくれる。それは，笑った者の頭に膠着するというのである。そこで河童との戦いでは，河童が笑うと靴がポーンとふっとんで河童の頭に移る。すると河童が急に強くなり，無帽の三銃士は負けそうになる。困って三銃士が笑う。靴がポーンと戻ってまた強くなる。次いで運動会の対校リレー・レース。靴は赤校と白校との笑ったほうに飛び移り，かぶったほうが優勢になる。異常を笑う者に罰が行くのは正常だが，それとともに超人力が付与されるのは異常である。ほんらい脱ぎたい靴帽子だが，勝つためにはそれをとりもどさなければならない。三銃士はこの矛盾に翻弄される。

三銃士が泥棒を追いかける。３人のほうが足が速く，泥棒があとから駆けてくるという落語だねも入れてある。

旅の方角を靴婆に占ってもらうと，“東西南北を逆立ちして見ろ”と言われる。これをかな書きにして逆立ちして読むと，東は死骸，西は死に，北は滝，南はやはり南だからとて南へ行くことにする。この趣向は後編の銀行の鍵でも用いられている。彼らが番号を66と読むが，じつは99であった。

圧巻は新選組と町方の捕手とに囲まれてのチャンバラである。衆寡敵せず，三銃士は“逆立ちの構え”をとる。すると敵も“打ちこむのがむつかしいや。おれたちも逆立ちになれ”と，全員逆立ちの珍試合になる。このコマのセリフは活字をさかさまに組んであるという念の入れかたである。

後編でにせ三銃士が現われる。まったく同じ姿をした2組の三銃士の一方は善玉で他方は悪玉である。世間はそれをとりちがえてうろたえる。

作者も言うように“これは世にも不思議でメウチキリンな物語”である。正常だと思ったものが異常になり異常だと思ったものが正常になる。異常を笑った者が異常を求めて笑わねばならなくなり，正常に戻ろうとする者があえて正常でない手段を構えて社会的承認を得ようとする。これはあべこべの人生論である。人はあべこべの論理をさとったときに安定し，あべこべに行動したときに幸福になるというのである。そのメウチキリンさが正常だとくそまじめに説いているところに笑いを感じさせられる。

6. 物語の寓意

この物語の作者の脳裏にそれと意識されていたのかどうかはわからないが，私はこの作品を読んで，長靴の三銃士に，当時の動揺していたわが国の姿を見るような気がした。

前編が発行されたのが昭和5年8月だが，さかのぼって大正11年のワシントン条約で日本の主力艦等が制限され，5年4月のロンドン条約ではさらに補助艦が制限されて，英米のわが国に対する劣等視と恐怖感とに複雑な感情をいだかせられていたころである。この条約は8年に廃棄を通告することになるのだが，国内ではこの軍縮をよろこぶ向きもあった。国民は貧窮にあえぎ，多額の軍備費の負担に耐えかねていたからである。

この時期に三銃士が生まれたのである。彼は靴帽子をかぶせられ，それを脱ごうと一生懸命になる。だが脱ぐとたちまち5人組や河童に負けてしまう。いやな長靴だが自衛のためにはかぶらなければならない。このあべこべの論理は，当時の日本人が軍備に対していだいたコンプレックスそのものではなかったろうか。わが国の武装は“鬼”に運命づけられたものであった。世界はそれを恐れ，非難し，解除し得ないでいるのを笑う。そのくせに，笑われ非難される武装を各国もほしいのであった。とすると日本も負担しきれない重荷ではあるが，それを英米なみには拡張しなければならない。

前編は，そうしたコンプレックスが主題になっているように見える。後編は昭和9年3月の発行で，前編以後4年間にわが国のたどった足跡が下敷になっているように思われる。すなわち昭和6年に満洲事変が勃発。翌年は上海事変。この年にリットン調査団がやってきて，日本の立場は不利になる。翌8年には国際連盟を脱退して，再軍備にふみきる。三銃士も，いったん祠におさめた長靴をとり出して活躍する。仲間をそそのかして，汽車の顚覆事件を起こし，ふたたび鬼に靴帽子をかぶらされる。“三銃士いづこへ”（第3巻のタイトル）ということになる。

彼らは独力で方向を定めようと，レーダーを作り南下する。上海で爆弾三勇士の霊から“御国のために生命を惜むな”と訓される。この辺から国家意識が出てくる。ローマではムッソリーニに歓迎される。満洲国の“迷子”を見付けて金を作って，ドイツから送り返してやる。このへんからにせ三銃士が現われる。パリでも，ロンドンでも，そしてニューヨークでも，にせと出合う。これらの国々でも軍備が進んでいるのだった。

動物の国へ行くと，動物の三銃士がいっぱいいて，飢饉で苦しんでいる。三銃士はライオン王に善政を布かせ，農民たちを救い，感謝される。竜宮が落魄しているのを見て，そのかたきの大鯨を討伐してやる。ここに日本海軍が出てくる。“東亜新秩序の建設”がうたわれるようになるのは昭和13年だが，東亜の国々を欧米の殖民地政策から救出することは，軍備拡充のよい口実になるのであった。

最後の巻は，満洲国へ行って日本陸軍の作戦に協力す

る。その敵軍の背後にはやはりにせの三銃士がいた。

こうした見方は牽強付会だろうか。だがどうも事実に符合しすぎるではないか。長靴は最後にまた祠に納められ鍵をかけられ，誰ももう長靴は決して出してはなりませんぞ”で終わっている。この一言に，筆者のひそかな平和への祈りを感ずるのである。

7. 連続漫画としての構成

この作品は1ページごとに上段に1コマの絵（9.2×7.7cm）を入れ，下段に4号活字で120字前後の文を組んである。文の中にはセリフがまじり，それにはいちいち発言者の名前が付いている。文が先に書かれ，絵はあとで描かれたのであろう。漫画は文の挿絵になっている。だから絵の系列には連続性がなく，連続漫画としては古い形式に属する。

ところが，特筆しなければならない新工夫が用いてある。それは映画技術をとり入れていることで，巻頭に凡例を掲げ，タイトル・サブタイトル・ダブル・シボルなどの術語を解説しておき，これらを文のなかで指定している。“この本をお読みになる時，こうした言葉の出てきた時は，このような気持になってお読みください。”とある。つまり読者に，物語を，スクリーンに投映されるイメージのように思いうかべさせ，場面の転換にイメージがダブったり，1カットの終わりがシボられたりするような気持で読ませるという趣向である。

また無声映画では，セリフがタイトルに書かれて写された。この作品では状況解説がタイトルに，各巻の「前説」（映画説明の前置きのことば）がサブタイトルとして出てくる。

このようにして映画の編集技術をそのまま紙面にとり入れたことは，当時としては新機軸だったのにちがいない。しかし絵のカメラ・アングルは固定していて，初期の活動写真を思わせる。ともあれ，漫画物語に映画の手法を応用することを試みた先駆的な作品である。（この試みは続く他の作品にも用いられ，戦後，手塚治虫にいたって見事に融合される。）

さらに，作者はイメージの速い転換に苦心をしている。1コマの絵が長い文の挿絵となっているのであるから，とかくイメージは遅滞する。そこで“ここは野球のラジオ式に大急ぎに読んで下さい。”とことわって，“チャリン　チャリン　チャリン　右に切こみました，左によけました，つきました，よけました，切りました，受けました，アウト。”のような矢つぎばやの表現をしたり。運動会のリレー・レースで長靴が笑った者の頭へポーン，ポーンととび移るあたり，イメージの遅滞を許さない。絵も画面が比較的広いので，その動態を1コマの中に描きこんでいる。文も絵も映画のように動く感じを出す工夫は，ほかにも，危機の切迫と救援者の難行とのカット・バックの技術や，乗物を乗り継いで追いつ追のわれつの追跡など，当時の活劇映画のおはこであったシーンを遺憾なく応用している。

8. むすび

「長靴の三銃士」とその続編「無敵三銃士」とは，“おもしろくて，ためになる”をモットーとした講談社の昭和初期の漫画本の代表作である。教訓がなまのままでタイトルに書かれては，場面に滑稽が演じられる。こうした教訓と滑稽との雑居は，文芸作品としては未熟なものになりがちであるが，これは映画の手法を模倣することによってたくみに同棲させることに成功している。

前編は，靴帽子なる一物にプラスとマイナスの誘意性を与え，それを刑として拒否しようとする要求と，それを如意宝として獲得しようとする要求とのコンフリクトを物語る。後編は靴帽子を如意宝として利用することを中心に，漫遊記ふうに，正義の使者としての冒険を語り，ついにその呪力から離脱するという話である。

しかしこれはただのおとぎ話ではない。靴帽子は，当時わが国の当面していた問題の軍備を寓意しているようである。三銃士は，軍備を廃することを切望しながら，軍備の必要に迫られていく当時のわが国民の姿になっている。その当時では軍備徹廃を大きく叫ぶことはできないのであった。テロが横行していた。そこで作者は，ひ

そかな平和への祈りをこめて，靴帽子の離脱を追及している。こう解するとき，この作品は，世相風刺の漫画として高く評価されるべきだと考える。

表現形式上の新機軸は，映画シナリオの体裁をとっていることである。文と絵とが別人の手でかかれ，物語が主で漫画はその挿絵の位置にあることは，物語漫画の初期の行き方を脱していないけれども，全体として映画の編集技術を応用して構成されており，文も絵も動的な感じを出すのに成功している。ズーム・レンズも，クレーン車もない活動写真の時代の技術ではあるが。この後，映画技術の吸収は一般にますますさかんになるが，それはシナリオの体裁を模倣することを越えて，画の連続性のなかに物語を投入して画と文とを一体化した物語漫画の形式を成立させていく。この作品はその方向づけを明らかに打ち出したという点で注目されるべきである。

SUMMARY

This comic-story, by Taisei Suzuki, was published in 1930, and gained popularity among children. As it was during the great depression, Japan was following a curtailment policy. According to the story, a girl and two boys threw their old top boots away into the mud. With that, a demon stuck a boot on the head of each child in order to punish them. The story tells howthey made a strenuous effort to pull the boots off —— all in a very humorous way.

Yet, the boots had a magic power, enabling the children to do anything they wished. Thus, they swore to become champions of justice: "the three musketeers".

They were, however, in a dilemma——wanting to pull off the boots symbolizing their punishment, and at the same time, they hoped to preserve their mighty power. I think this situation symbolizes the dilemma of the expansion and the reduction of armaments which our country was confronted in those days.

At that time, great courage was needed to oppose the Japanese army. So I think the author, in cynical way, might have been expressing his secret hope for peace. At the end of the story he makes the musketeers take off the almighty caps and shut them up in the shrine and say, "Never take them out again!"

書　評

平岡敏夫著　速解現代国語

三省堂・昭和43年4月刊　A5判・217ページ・¥260.

この本は，高校生を対象として，「どのようすれば，文章が速く正しく読めるかということについて，かなりくふうをこらした本」(はしがき) である。国語力を速読・速解ににによって育成しようとするのがこの本のねらいである。そして，これまでの国語教育や入学試験のあり方の背後にある短文遅読としての精読主義を排して，精読のための長文速読を主張する。長文速読の一部として例題には入学問題などの短文に応用し練習させる方法をとっている点に本書の特長がある。

まず，全体を序編，基礎編と応用編との三つにわけている。序編においては，速読・速解の意義について，従来の遅読としての精読主義を批判しながら，新しい読書法としての速読の意味を論じている。基礎編においては，これを三つの章にわけ，第一章を「速読み」として，(1)題目読み，(2)冒頭読み，(3)一目読み，(4)とばし読み，(5)予想読み，(6)目的読み，(7)意地悪読み，(8)楽しみ読み，(9)逆読みの9種類の方法について例題を中心に練習できるようになっている。第二章では，「速解き」として，(1)傍線引き，(2)段落チェック，(3)キーセンテンス，(4)キー・ワード，(5)たとえば……，(6)折れ曲がりの六つの種類について述べ，第三章では，「速書き」として，(1)文章作り，(2)文作り，(3)漢字書きの三つの方法を示している。そして，応用編ではこれらの速読み，速解き，速書きの方法を実際に応用させる問題が提示されている。つまり速読，速解のテキストとしての性格の本である。

今日の国語教育において，“どのようにして国語力を向上させるか”ということは重要な課題である。特に，読みの能力における速読力の育成は，これまでほとんど問題にされていなかった。それは著者が指摘しているように，短文遅読による精読主義によるからである。このことは，国語教育における指導方法の改善に大きく関係しているばかりでなく，それを根底とした読書法の改善の問題でもあるといえる。この本が高校生の現代国語の学習書としての性格を超えて，こうした国語教育が当面している課題に一つの方法を具体的に示した意味は，きわめて大きいものがあるといえよう。しかも，国語教育という一つの視点から，これまで論じられたり，試みられてきた速読や速解の方法に，著者の豊かな経験とくふうが加えられ，一つの体系化に成功している。

しかし，こうした本書の考え方やあり方は，それが高校生の現代国語の学習書として書かれたということもあって，私どもには聞きなれない用語，例えば，題目読み，冒題読み，意地悪読みなど，でその方法を表現している。しかし，読んでみるとなるほどとうなずけるし，おもしろくもあり，高校生の心を把えるには十分に耐えうるものだといえよう。現代国語の学習という場面で，具体的にその方法を示したことに敬意を表したい。しかし，読書科学という観点，ないしは欧米における実際といった面からみると，問題がないわけではない。この本が速読，速解といっても，欧米的な表現を使えば，大部分は学習法(study skills) に近いものであり，速読はその一部にしか当っていない。その点では，ロビンソンのSQ3R法の方がはるかに優れているものを持っているといえよう。だからといって，この本の価値を低からしめるものではない。

高校生の学習書といえば，この本は例題（主として入試問題）と設問，それに解題が少しついている構成であるが，やはり学習書という性格，あるいは速読・速解のテキストであるならば，もっとくふうが必要ではないだろうか。少くとも，速読み，速解きのそれぞれの方法について，具体的な例題を示しながら説明し，次にその練習問題やポイントを示すべきであって，学習書としてはプログラミングが必ずしも成功しているとはいえない。もっと，最近の進んだ学習書の方法をとり入れるべきではなかったと思われる，旧い学習書の型を抜けきれてはじめてこの本の目的が達成されるのではないだろうか。

しかし，こうした本が高校生のために出版されたということは，誠に喜ぶべきことであり，われわれが望んでいた一つの方向を具体化したものとして高く評価したい。　（室伏　武）

浜中重信編著　小学生の読書指導

これは国語科における読書指導の実践の研究書である。数年前，大阪市小学校教育研究会の国語教育研究部の中に設けられた読書指導班の研究業績をまとめたもの。新しい学習指導要領

でスポット・ライトが当てられた問題に，すでに5年以上も挑戦してきているだけに，きわ物ではない。

根幹となっているのは学級における集団的読書指導の実践研究で，学年ごとの指導例のほかに，バズ学習をとり入れた試みや，特殊学級の場合などが掲げられていて，開拓的な示唆に富んでいる。

これらは巻頭の問題提起である国語科の中での読書指導の意味（その必要性とねらい）の展開としていっそう資料としての価値を発揮している。すなわち現行の指導要領のわくの中では，①教科書の教材だけでは読書を生活化するのに不足する，②もっと読み広げと読み深めとが必要だし，③速読と多読の指導も必要だ。④マスコミ時代に処するために読書力と読解力との向上をはかり，⑤文学の鑑賞指導を強化しなければならないと提唱している。この中で，速読指導の実験的研究の資料は，科学的なデータとしても価値がある。

巻末には読書指導の環境造りに関する諸問題が具体的に解明されている。

全体として，“学問的な究明は学者に任せることにして”それよりも実践の場を耕すことに精力が集中されている。それでいて的は外れていない。ことし大阪で大会を持ち，大阪パワーの実力に感心したことであったが，本書はその一角を代表するものと見ていいだろう。B6版，401ページ，800円，文理書院，昭43年9月刊。（阪本一郎）

会　　報

第2回　読書科学賞

本会の創立10周年記念事業として設けられた読書科学賞規程により，本年度は次のように賞状が贈られた。

読書科学賞　（該当者なし）

読書科学研究奨励賞　高木和子氏

昭和42年度に読書科学に発表された「回帰成就値による読書不振児の研究」への参加，及び海外研究情報の収集提供に対して。

受賞者略歴

高木和子氏[redacted]

選考経過

7月29日の常任理事会を選考委員会に切り替え審議をした。

会員及び関係有識者にアンケートした結果は，回答の過半数が「該当者なし」であった。その他で問題となったのは次の5件であった。

(1) 大久保忠利氏――「日本文法陣述論」明治書院。

(2) 西尾実・石橋幸太郎・野地潤家・垣田直巳・松元寛氏――「言語教育学双書」6巻，文化評論出版。

(3) 岡田明氏――「読書教育の心理」

(4) 西郷竹彦氏――「文学の世界」「文学の理論」「国民教育としての文学教育」等。

(5) 児童言語研究会――「国語教育研究」で“一読総合法”を確立した。

これらについて選考をしたが，意見の一致を見ることができず，残念ながら本年度は該当者なしと決定した。

研究奨励賞は昭和42年度「読書科学」に発表の論文のうち阪本一郎及び昨年度受賞者大神貞男両氏を除外し，未完論文は完結の年に選考することにして選考し，上記のように決定した。

第12回　研究大会　（昭和43年8月9～10日）

後　援　文部省　大阪府教育委員会　大阪市教育委員会

協　賛　日本図書館協会　全国学校図書館協議会　大阪府学校図書館協議会　大阪市学校図書館協議会　大阪市小学校教育研究会　大阪市中学校教育研究会　大阪市高等学校教育研究会

会　場　大阪厚生年金会館

第1日

○実践部門

午　前　司会　岩井義一・宗田徳義

読書指導の体系とその実践
大阪市立東中川小学校　上林長泰
読書発表会による読書興味の指導
大阪市立高松小学校　加藤薫敏
市民運動の一環としての読書運動の試み
尼崎市立小田南中学校　井田泰三
国語科における読書会の素材と長文指導
茨木市立玉櫛小学校　大橋志雄
読書指導の実践とその考察
兵庫県志方東小学校　磯野道子

午　後　司会　天野文雄・大町文生
文学的教材による読むことの指導の計画と方法
大阪市立海老江東小学校　内海国雄
話し合いを中心とした集団読書指導の実践
大阪市立天下茶屋小学校　中原正文
読書興味指導と学校図書館P・R活動との関連
大阪市立松虫中学校　中島章一
小学校における読書の効果とその指導
川越市立山田小学校　楮本良平
読書感想文による思索読書を深める指導
豊中市立第三中学校　斎藤はるみ
自由研究討議会

○理論部門

午　前　司会　三輪計雄・合田　修
知識の読み物の現状分析と利用の指導
合田　修　寺本俊美
大阪子ども読書研究グループ　友松儀雄　花園幸雄
中川弘和　岩坪昭子
文法力の発達に関する研究
野間教育研究所　高木和子
読書指導における基本読書材の研究
東京都立教育研究所　出雲路猛
読み物の中の宗教的態度への感動の実態とその開発
秋田県教育庁南教育事務所　渡辺正己
大学生における速読訓練の研究
順天堂大学　加賀秀夫

午　後　司会　池田信夫・相馬信男
読書療法における治療目標と読書選択の指標に関する考察
千葉家庭裁判所　大神貞男
中学生に「坊ちゃん」をどのように読ませるか
吉井善三郎　磯野岩男
大阪中学生の読書研究会　大町文生　栗駒乃富子
中島章一　望月道子
音読能力の発達の一調査　立正女子大学　岡田明
L.Y.Lとよみの場について　信州大学　清水正男
読みやすさの規準について　日本女子大学　阪本一郎
自由研究討議会（合同）

第2日

○公開講座　読解指導と読書指導
あいさつ　会長　阪本一郎
読解指導と読書指導の関連
東京学芸大学教授　望月久貴
文学教材の指導法
大阪教育大学教授　弥吉菅一
大阪市北天満小学校長　浜中重信
道徳教育と読書指導
東京学芸大学教授　深川恒喜
読書指導の研究課題
日本女子大学教授　阪本一郎
あいさつ　大阪大会委員長　西藤寿太郎

理事会（8月9日）

1. 常任理事会の報告及び提案について――常任理事会からの昨年度の事業報告及び本年度以降の事業に関する提案を承認した。
2. 予算・決算について――昨年度決算を承認し，本年度予算について審議，別掲のように決議した。
3. 総会に提出すべき議案について――別掲のように決議した。

総　会（8月10日）

(1) 会長あいさつ
(2) 事業報告及び事業計画
a　読書指導の研究について
昨年度の総会における深川理事の提案によりこの特別委員会を特設した。委員は出雲路猛・岡本奎六・黒沢浩・斎藤喜門・阪本一郎・滑川道夫・深川恒喜・水野寿美子・室伏武の各氏。教育課程審議会の答申に対して，読書指導の

あり方を研究討議して，12月10日，文部大臣に「読書指導に関する要望書」を提出した。文部省の決定を待って，さらに研究を続行する予定である。

b　標準読み物研究について

この特別委員会では，人格形成の系統的な発達課題に応ずる適書の選定を行なってきた。その成果を学芸図書KKから「人間形成の標準読み物目録」という書名で公刊した。186ページ，800円。

c　機関誌の発行について

「読書科学」第11巻4号は「1967年年報」として編集したが，あいかわらず原稿が出揃わず遅刊している。9月には第12巻1号と同時に発行の予定。

d　公開研究会について

しばらく中断していた東京での公開研究会は，11月にDawson女史，1月に室伏・半田両氏，2月に岡田・横溝両氏を講師にして開催した。毎月第3土曜日に開く予定である。

e　IRA関係について

7月，前会長Bracken女史を団長とする視察団が来日，渋谷区大向小学校で研究授業と合同研究会を開いた。11月に前会長Dawson女史が来日，公開研究会を開いた。女史は世界会議を日本で開くための会場を物色していった。

第2回世界会議はコペンハーゲンで今年8月1～3日に開かれた。本会からは室伏武氏，滑川道夫氏，倉沢栄吉氏が出席した。

(3)　予算・決算の承認（別掲）

(4)　役員改選（別掲）

(5)　読書科学賞の贈呈（別掲）

昭和42年度決算

I　収　入	1,207,009円	
	前年度くりこし金	64,353
	会　費	390,311
	賛助会費	650,000
	売上金	35,808
	寄　付	2,000
	広告料	24,500
	第11回大会参会費	19,200
	印　税	19,656
	利　子	1,181
II　支　出	1,207,009円	
	機関誌出版配布費	667,500
	第11回研究大会費	113,240
	人件費，謝金	120,000
	本部運営費	77,840
	消耗品，印刷費	76,665
	通信費，交通費	88,175
	研究会費	16,358
	次年度へくりこし	47,231
III　差　引	0円	

昭和43年度予算

I　収　入	1,178,231円	
	前年度くりこし金	47,231
	会　費	400,000
	賛助会費	660,000
	売上金	40,000
	広告料	30,000
	利　子	1,000
II　支　出	1,178,231円	
	機関誌出版配布費	900,000
	第12会研究大会補助	50,000
	人件費，謝金	120,000
	本部運営費	30,000
	消耗品，印刷費	30,000
	通信費，交通費	30,000
	研究会費	10,000
	雑　費	8,231
III　差　引	0円	

常任理事会（9月16日）

(1)　本年度大会について

別記のように実施された。定員は300名であったが，当日の参会者は340名を越えた。また当日の新入会員は32名であった。このため尽力された尾原理事及び大阪事務局に感謝の意を表する。

(2)　役員改選について

本年は役員改選の時期に当たるので，総会において理事及び

監事が，理事会において理事長及び常任理事が，別掲のように互選された。

(3) 機関誌発行について

「読書科学」11巻4号(No. 42)，12巻1号(No. 43)は9月中には発行の見込み。次号は12月までに発行の計画である。なんとかして遅刊を回復したい。

(4) 世界読書学会議参加者の帰国について

8月1～3日，コペンハーゲンで開かれた第2回会議に参加した室伏武氏，滑川道夫氏，倉沢栄吉氏は無事帰国された。会議の模様は今月の公開研究会で報告される。

研究談話会（9月16日）

「読書によって思考力を深めるための一つの試み」新潟県立高田北城高校　早津秀雄氏

公開研究会（9月21日）

「海外の読書教育の諸問題――第2回世界読書学会議に出席して」

講師　倉沢栄吉氏　滑川道夫氏　室伏武氏

会場　日比谷図書館会議室

参会者43名で，盛会であった。

公開研究会（10月19日）

「一般意味論と読みの指導――いかにして意味を読みとらせるか」について，福沢周亮氏を中心に，千代田区教育センターで，討議が持たれた。参加者26名で盛会であった。

常任理事会（10月21日）

(1) 機関誌の発行について

「読書科学」No. 42，43の印刷がまだ遅れている。印刷所の都合なので不可抗力である。No. 44は編集中。

(2) 共同研究について

「現代読書心理学の展望」について，研究分担が決まった。近々それぞれに依嘱する。

公開研究会（11月16日）

「国語科における読書指導――とくに作品の鑑賞について」，望月久貴氏を中心に，日比谷図書館会議室で討議された。参加32名で盛会であった。

躍進する教育の総合メーカー・学研

■幼児から母親までの系列月刊誌
よいこのくに
よいこのがくしゅう
（よいこのかがく）
1年の学習
2年の学習
3年の学習
4年の学習
5年の学習
6年の学習
1年のかがく
2年のかがく
3年の科学
4年の科学
5年の科学
6年の科学
中1の学習
中2の学習
中3の学習
中1の科学
中2の科学
中学一年コース
中学二年コース
中学三年コース
高1コース
高2コース
大学受験 高3コース
小説 女学生コース
美しい十代
ヒットポップス
フェアレディ
マイウェイ
暮しの知恵
幼児の指導
月刊教育ジャーナル

■全集・文庫
母と子の
　世界名作絵物語全集
新しい世界の幼年童話
新しい
　世界の童話シリーズ
少年少女
　新しい世界の文学
物語日本史
新しい世界の伝記
少年少女
　ベルヌ科学名作全集
少年少女世界文学全集
レモンブックス
富島健夫青春文庫
国木田独歩全集

■書籍・辞典・教材・教具
新世紀大辞典
BSCS生物
世界の美術
世界の音楽
……ほか多数

■百科事典
学習こども百科
原色学習図解百科
標準学習百科大事典
現代新百科事典
原色現代科学大事典
原色現代新百科事典
現代ホーム百科事典
現代の家庭医学

■学研文具
■教育映画・スライド
■学研の玩具
■教育機器・事務機

学研

本社　東京都大田区上池上町 264　　学習研究社　　電話（東京）720－1111 大代表

Vol. XII, No. 2. April, 1969

昭和四十四年一月二十日発行（年四回発行）

THE SCIENCE OF READING

Edited by The Japanese Society for the Science of Reading
President : SAKAMOTO, Ichiro
c/o Department of Child Study, Japan Women's University, Japan.

CONTENTS

Original Articles

Transition of the image of Momotarō, a Japanese old tale (4)……NAMEKAWA Michio…… 1

A comparative study on the children's appreciation of a Grimm's Märchen and its adaptation……HISAMOTO Tomoko, HAGA Jun……15

Picture book with infants……SAKAMOTO Ichiro, FUJII Masumi TSUTSUMI Yoshiko, ARAI Yoshiko……23

On the comments on reading by S. Koizumi……HIDA Fumio……30

On a story comic : Three Musketoors in Top Boots……SAKAMOTO Ichirō……36

Book Reviews ……43

Official Notes ……44

第12巻　第2号
<通巻　第44号>
昭和44年4月1日　印刷
昭和44年4月20日　発行

会員頒布（会員外頒価　300円）

東京都文京区目白台2—8—1
日本女子大学家政学部阪本研究室内
振替東京3213番

編集・発行者　日本読書学会
代表　阪本一郎

発行所　日本読書学会

印刷・第一印刷株式会社